

2016年度 博士課程後期 学位論文

独居高齢者における被援助志向性に関する研究

A study of help-seeking preferences  
among the elderly living alone

横浜国立大学大学院 環境情報学府

環境イノベーションマネジメント専攻

責任指導教員： 安藤 孝敏 教授

学籍番号： 13TE004

高橋 知也

TOMOYA, TAKAHASHI

2017年3月

## 目 次

第1章	本研究の問題意識と目的	1
I.	本研究における被援助志向性の定義	2
II.	被援助志向性や援助要請に関する先行研究のレビュー	3
III.	高齢者の被援助志向性について研究する意義	5
IV.	対象者を独居高齢者に限定する意義	6
V.	本研究の目的	7
第2章	研究Ⅰ 「被援助志向性尺度」の高齢者への適用可能性についての検討	10
I.	問題と目的	11
II.	方 法	12
III.	結 果	15
IV.	考 察	20
第3章	研究Ⅱ 短縮版被援助志向性尺度の作成	25
I.	問題と目的	26
II.	方 法	26
III.	結 果	27
IV.	考 察	31
第4章	研究Ⅲ 高齢者用被援助志向性尺度の作成と関連要因の検討	33
I.	問題と目的	34
II.	方 法	35
III.	結 果	40
IV.	考 察	45

第5章	研究Ⅳ 高齢者用被援助志向性尺度における信頼性および 妥当性の再検討	50
Ⅰ.	問題と目的	51
Ⅱ.	方法	51
Ⅲ.	結果	56
Ⅳ.	考察	61
第6章	研究Ⅴ 「他者に援助を求めること」に関する独居高齢者 へのインタビューの内容分析	63
Ⅰ.	問題と目的	64
Ⅱ.	方法	65
Ⅲ.	結果	70
Ⅳ.	考察	74
第7章	結論	111
Ⅰ.	本研究の成果と意義	112
Ⅱ.	今後の展望と課題	115
	引用文献	117
	謝辞	123
	資料	124

## 第 1 章

### 本研究の問題意識と目的

## I. 本研究における被援助志向性の定義

自分ひとりでは解決が困難であると思われる問題に直面したとき、人は「誰かに援助を求めると否か」という選択を行うこととなる。その選択において援助を求めることを選択した場合、人は一緒に問題を解決してくれるものと期待できる他者を探し出し、何らかの形でその他者が自分を援助してくれるよう要請するだろう。結果としてその他者が要請に応諾して適切な援助を提供すれば、問題解決の可能性は高まるものと考えられる。人はこのようにして、しばしば生じる個人では解決困難な課題を他者の援助を受けながら解決してきた。このような「他者に対して援助を求めること」を指すタームとして、海外では「help-seeking」、我が国では「援助要請」という語が用いられており、先に挙げた一連のプロセスは「援助要請行動の生起モデル」（高木, 1997）と呼ばれている。

表1 援助要請行動の生起モデル（高木 1997）

- 
- 1 自己の問題に気づくか
  - 2 問題が重要だと判断するか
  - 3 問題の解決能力が自分にあると判断するか
  - 4 問題解決のために他者に援助を要請すると意思決定するか
  - 5 適当な援助者を探し出せるか
  - 6 適当な援助要請の方略を思いつけるか
  - 7 実行した援助要請が応諾されたか
- 

help-seeking とは、「個人が問題の解決の必要性があり、もし他者が時間、労力、ある種の資源を費やしてくれるなら問題が解決、軽減するようなもので、その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を要請する行動」（DePaulo, 1983）と定義される概念である。help-seeking に関する研究は海外においてその端を発し、わが国においては社会心理学の分野で最初に紹介された（相川, 1987）。今日国内における研究で用いられる援助要請とい

う表現は help-seeking の訳語であり（水野・石隈, 1999）、さらにここから派生した概念である help-seeking preference は「被援助志向性」、help-seeking behavior は「援助要請行動」とそれぞれ翻訳されて用いられている。

以上を踏まえ、本研究では従来の国内外における先行研究に則り、help-seeking preference の概念を「被援助志向性」の名称で扱う。なお我が国においては、他者を助けるという意味での「援助」や「支援」、「サポート」といった語を同一の概念を指すものとして併用している研究や報告が多いのが実情である。これらの語には必ずしも明確な使い分けがあるわけではないものとみられるが、本研究では混同を避けるため、これらの語のうち社会福祉学事典(2014)に項目のある「援助」の語を用いる。またその定義についても、同事典に則り「ある人のおかれている望ましくない状況に対し、その人との関係性に基づいて、何らかの方法を用いて改善を目指す過程」とする。

なお本研究で扱うのは「高齢者の被援助志向性」であり、水野・岩隈(1999)が「その詳細については研究者ごとに定義すべき」と指摘するように、対象者に沿った定義を新たに設定する必要がある。そこで本研究では高齢者の被援助志向性の定義を DePaulo (1983) および水野 (2003) から援用し、「高齢者が家族や親類などの身近な援助者や公的機関および援助を提供する専門職者、あるいは日頃より交流のある友人などにどの程度援助を求めるかの認知的枠組み」として用いることとする。

## II. 被援助志向性や援助要請に関する先行研究のレビュー

被援助志向性を扱った国内の研究は「報酬の有無に関わらず他者を援助することを目的として行われる社会的行為」、即ち援助行動に関する研究に比べて少ないものの、国内論文に限定した文献レビューでは 2016 年 12 月時点において 120 件あまりが確認できる。これら従来の先行研究においては、被援助志向性が重要となる場面として「大学生による学生相談室の利用」（高野・宇留田, 2002、高野ら, 2008 など）や「育児における悩み事の相談

場面」(越谷, 2012、本田ら, 2009 など)、あるいは「ヒューマン・サービスに従事する専門職者の問題解決場面」(田村・石隈, 2001、2006 など)といったものが想定されており、特に心理臨床や学校教育といった領域では、それぞれの属性(中学生や大学生、アジア系留学生、中学校教師など)における被援助志向性に焦点を当てた論文(水野・石隈, 2001、田村・石隈, 2002、木村・水野, 2004、水野ら, 2009 など)や、特定領域におけるレビュー論文(水野・石隈, 1999、木村, 2014)などの形で一定数の報告がなされている。

一方でこうした領域とは「本質的な違い」(水野・石隈, 1999)を持つ、援助者や援助内容およびそれらが生じる場面を特定しない、いわば日常生活における被援助志向性を扱った研究の蓄積は相対的に乏しい状況にある。とりわけ高齢者の日常生活における被援助志向性や援助要請行動について扱った研究は、高齢者大学の受講生を対象に「同一人物における援助行動と被援助行動の関連を明らかにすること」を目的として行われた研究(高木・妹尾, 2006)に留まっているのが現状であり、高齢者の被援助志向性を測定する尺度の作成やその関連要因の検討などはなされていないものとみられる。

また海外では、我が国に先駆けて被援助志向性や援助要請行動の研究が行われてきた。一連の研究は Phillips (1963) による援助要請行動とスティグマとの関連についての報告に始まり、Fischer and Turner (1970) による「男性よりも女性で被援助志向性が高い」という我が国と同様の傾向を示す報告のほか、現在までに高齢者の被援助志向性や援助要請行動について検討を行った論文も複数発表されている(Stoller & Culter, 1993、Waxman et. al, 2007、Husaini et. al., 2008 など)。しかしこれらの論文を含むレビューを行った結果、国内と同様、独居高齢者における被援助志向性に関する研究報告や高齢者の日常生活における被援助志向性を測定することを想定した尺度の作成は確認されなかった。

なおこれらの国内外における先行研究の蓄積から、被援助志向性に影響を与える要因として、個人属性変数(性別や年齢、学歴など)やネットワーク変数(ソーシャルサポートなど)などが示唆されている。これらの要因については、本研究においても改めて検討を行う必要があるといえよう。

### Ⅲ. 高齢者の被援助志向性について研究する意義

近年、高齢者が可能な限り長く地域で生活できることを目指した取り組みが広く推進されている。その中でも、自治体における地域包括支援センターの設置や地域住民主体によるサロン活動などは、高齢者もまた前述の「援助要請行動の生起モデル」、あるいはそれに類する援助要請のプロセスを踏むものと想定し、より高齢者がアクセスしやすい援助要請先として機能することを目指して整備が進められてきたものの一例であるといえよう。例えば、東京都大田区で医療・介護・福祉の専門職により組織された任意団体「おおた高齢者見守りネットワーク（通称『みま～も』）」では、専門職同士がネットワークで繋がることで、高齢者の見守りはもちろん、健康寿命の延伸を目指すウォーキングなどの運動プログラムや、社会参加を促す絵本読み聞かせボランティア養成プログラムなどの多種多様なプログラムの提供を行うことで、高齢者が可能な限り地域で健康に生活できる地域づくりを目指している。このような高齢者向けサービスの提供は「援助に対する被援助者の反応は肯定的なものだという、いわば暗黙の前提」（相川, 1987）に則って行われるものであり、実際にこれらを活用しながら社会参加を継続することは、高齢者のこころと身体の健康と長寿を達成することに資するものと考えられる。

しかしながら、調査対象としたケアマネジャーの 61.1%が高齢者から援助拒否をされた経験を持つ（小川ら, 2009）といった報告などから、生活困難な状況に置かれてなお、支援者による援助やサービスを利用することを拒む高齢者が少なくないことが明らかになってきた。高齢者の拒否にあうことで援助の困難が生じ、高齢者の生活をめぐる課題もより深刻になってしまう（楠木, 2007、鈴木ら, 2012）可能性や、元来高齢者が「周囲に相談しない傾向」を持つ（岩田・大川, 2015）という報告なども併せて考慮すれば、援助やサービスの利用を拒む高齢者について検討することは、高齢期における社会的孤立やそれに伴う諸問題に正対する上で重要であると考えられる。



#### IV. 対象者を独居高齢者に限定する意義

我が国においては、戦後の高度経済成長期から今日に至るまでの核家族化の進行や平均寿命の延伸、多様な価値観の定着などにより単身高齢者世帯が増加を続けており（高齢社会白書, 2016）、独居という生活形態はもはや特別なものではなく、多様化した生活形態の中の一つであると考えられるべきであろう。独居状態にある高齢者においては、他者への援助要請の方略そのものが、親類縁者などと同居する高齢者に比べて乏しいことが予測される。それは、身近な同居者の存在によって援助要請が容易になる、あるいは同居者による気づきが契機となって当事者に対する援助に結びつく可能性が高まることに由来する。一方独居高齢者においては、有事に際して別居状態にある親類縁者や友人、もしくは行政機関や専門職者といった相手に対する何らかの方略を用いた自発的な援助要請が必要不可欠となる。この点を考慮すれば、斉藤ら(2009)の指摘にもある通り、独居状態にあることそのものが、独居高齢者が抱えているリスクファクターの一つとなり得ることは自明であろう。

独居高齢者が援助要請行動に関する問題を抱えることは、社会的孤立やその延長にある孤独死、あるいは消費被害のリスクにも繋がると考えられる。当然ながら、独居高齢者を取り巻く環境の整備も重要な課題であるが、如何に優秀なセーフティネットが構築されても、その仕組みが有効的に活用されなければ、十分な効果を得ることは難しいと言わざるを得ない。またその仕組みを活用するか否か、という最終的な判断は利用者側に委ねられることも考慮すれば、援助要請行動を生起させる被援助志向性について検討することも、こうした社会問題の解決の糸口にもなり得る重要な課題であると考えられる。

以上の背景を踏まえ、本研究では特に独居高齢者の持つ被援助志向性に焦点を当てた検討を通じ、その測定に用いる尺度の作成や関連要因を明らかにすることを主たるねらいとしたい。

## V. 本研究の目的

以上より本研究では、以下の一連の研究から独居高齢者の被援助志向性について検討を行うことを目的とする（図 1）。

### (1) 研究Ⅰ 被援助志向性尺度の高齢者への適用可能性に関する検討

被援助志向性を測定するにあたっては、心理尺度を用いた検討が有効であると考えられるが、前述のとおり、国内外における先行研究をレビューした結果、高齢者の被援助志向性を測定するための尺度は今日までに作成されていないことが確認された。そこで研究Ⅰでは、元来教師の被援助志向性を測定することを想定している尺度ではあるが、項目内容から高齢者への適用可能性があると判断した「被援助志向性尺度」（田村・石隈，2001）を用いて、その尺度が高齢者の被援助志向性を測定する尺度として機能するかを検討する。

### (2) 研究Ⅱ 短縮版被援助志向性尺度の作成

2 因子 11 項目で構成される被援助志向性尺度は、本来の回答者として想定している教師が回答するにあたって、特段大きな負担を強いるものではないと考えられる。しかし、他の尺度や質問項目との併用を考えるならば、この項目数であっても高齢者には負担となりうると考えられる。また回答漏れの防止や調査票の回収率向上などの観点からも必要と考えられる短縮版を作成する。

### (3) 研究Ⅲ 高齢者用被援助志向性尺度の作成と関連要因の検討

被援助志向性尺度およびその短縮版では、家族や友人から得られる援助を想定した質問項目のみで尺度が構成されているが、高齢者用の尺度を作成する際は「身近な他者」と「公的な他者」、すなわち「家族などの身近な相手からの援助」と「公的機関などからの援助」の両者に対する被援助志向性を幅広く捉えることのできる尺度である必要があると考えられる。それらを含んだ「高齢者の日常生活における被援助志向性を測定すること」に特化

した尺度が作成されれば、その回答から個々に持っている被援助志向性の特徴をよりの確に把握でき、実践的な援助関係を構築する際の有用な手がかりとなるものと考えられる。

そこで研究Ⅲでは、被援助志向性尺度およびその短縮版を基に「高齢者用被援助志向性尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討するとともに独居高齢者の被援助志向性の関連要因についても検討する。

#### (4) 研究Ⅳ 高齢者用被援助志向性尺度の再検討

新たに抽出した異なるサンプルを対象に用いて質問紙調査および分析を行うことにより、研究Ⅲにおいて作成された高齢者用被援助志向性尺度が、尺度として安定したものであるかを再検討する。

#### (5) 研究Ⅴ 「他者に援助を求めること」に関する独居高齢者へのインタビューの内容分析

研究Ⅳにおいて調査対象とした独居高齢者のうち、「援助に対する欲求」と「援助に対する抵抗感」のそれぞれに特徴的な尺度得点を示した者を対象としたインタビュー調査を実施することで、それらの要因についてより具体的に検討して整理、体系化するとともに、定性的に高齢者用被援助志向性尺度の妥当性を再検討する。

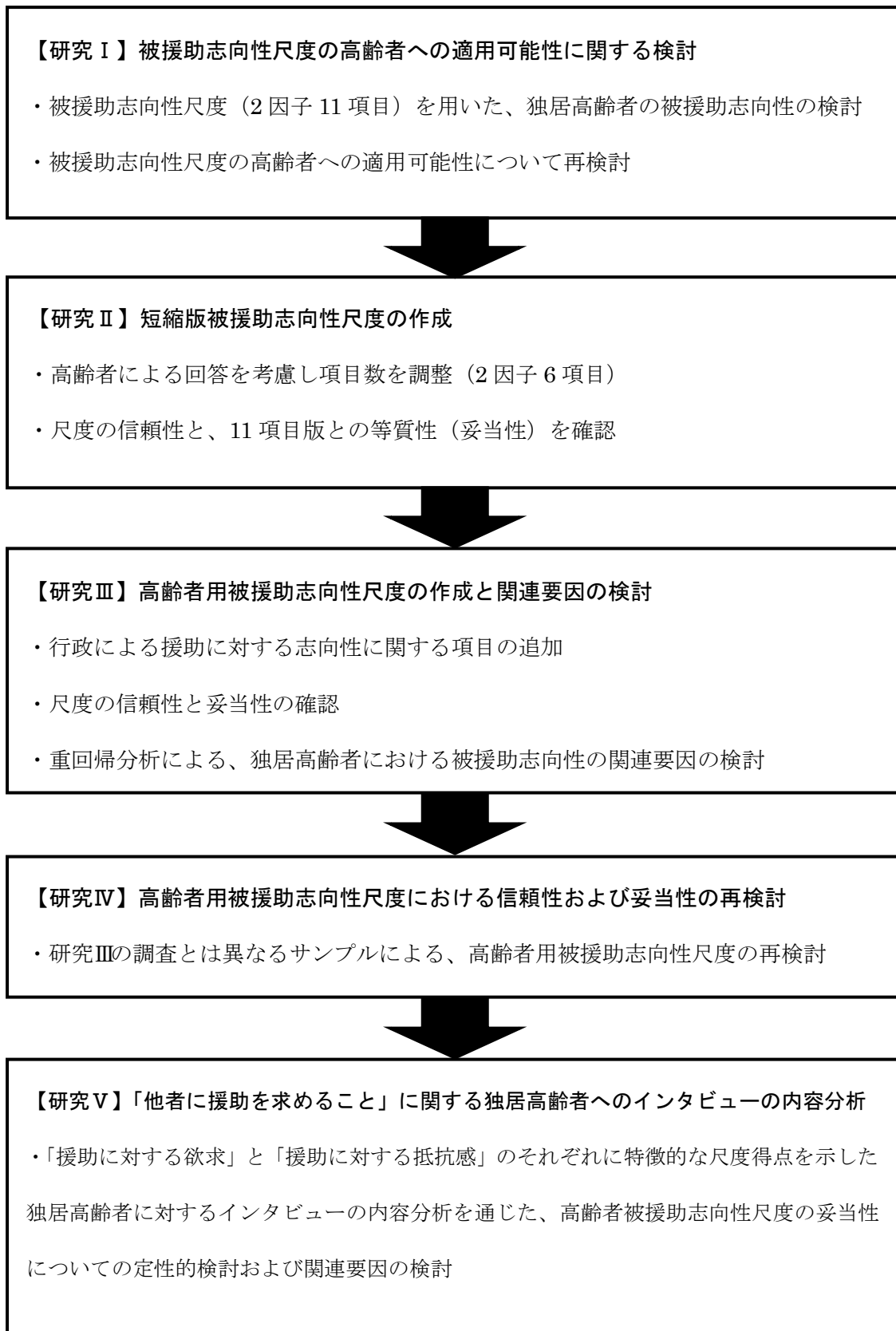


図 1 本研究のフローチャート

## 第 2 章

### 研究 I

#### 被援助志向性尺度の高齢者への適用可能性に関する検討

## I. 問題と目的

小川ら(2009)の報告などにより、生活困難な状況に置かれてなお、民生委員や地域包括支援センターといった援助者による支援を拒む高齢者が少なくない現状が明らかになってきた。こうした現状に鑑みれば、独居高齢者の被援助志向性について詳細な検討を行うことは高齢者の孤立やその延長上に生じうる孤独死を回避するための対策を講じる上で非常に重要であると考えられる。

しかし第1章で述べた通り、先行研究のレビューの結果、現在までに高齢者の被援助志向性を測定する尺度は作成されていないことが確認された。被援助志向性を測定する尺度は、教師の被援助志向性を測定する被援助志向性尺度(田村・石隈, 2001)やスクールカウンセラーに対する被援助志向性尺度(水野・山口・石隈, 2009)、中学生の友人や教師、家族に対する被援助志向性尺度(本田・新井・石隈, 2011)など今日までに複数作成されている。本研究ではこれらの尺度のうち、田村・石隈の被援助志向性尺度を採用することとした。この尺度は専門性を含まない一般的な内容の質問項目(「自分が困っているときには、話を聞いてくれる人が欲しい」など)で構成されており、高齢者の日常生活における被援助志向性を測定する尺度としての利用可能性があると判断したためである。

本研究では独居高齢者の「援助を受けること」に対する認知的な枠組みを、被援助志向性尺度を用いて明らかにする。ただし上述の通り、この尺度は元来ヒューマン・サービスとしての学校教育の担い手である教師の被援助志向性を測定するために開発された尺度であって、高齢者の日常生活における被援助志向性を測定することを想定したものではない。そこで、被援助志向性尺度によって高齢者の被援助志向性を測定することが可能であるかの検討を行った上で、独居高齢者における被援助志向性について基本属性や社会変数の違いから検討することを目的とする。

## II 方法

### 1. 調査対象者

本研究では、社会調査会社にモニター登録を行っている独居高齢者（調査 1）と、A 市内の団地に居住する独居高齢者（調査 2）の 2 つのサンプルに対する調査を実施した。前者においては尺度の信頼性や基本属性および社会変数による尺度得点の平均値の差について検討し、後者においては基準関連妥当性の観点から尺度の妥当性の検討を行った。調査および分析に用いた質問紙の項目は、調査 2 にのみ含まれていた（同団地内に存在する）「見守り交流サロンの利用」を除き、いずれの調査においても共通であった。

#### 調査 1. 社会調査会社モニターの独居高齢者

社会調査会社にモニター登録を行っている 65 歳から 84 歳の独居高齢者を対象とする、郵送による自記式質問紙調査を実施した。調査は 2014 年 1 月に行われ、161 名から回答を得た。得られたデータについてクリーニングを行い、最終的に 158 名を分析対象とした（表 1）。回答者の内訳は、男性 41 名(25.9%)、女性 117 名(74.1%)であり、平均年齢は 72.7 歳 (SD:5.8)であった。

#### 調査 2. A 市内の団地に居住する独居高齢者

A 市内の団地に居住する住民で、2012 年 12 月末時点で独居状態にある 65 歳から 84 歳の高齢者 250 名を対象とする郵送による自記式質問紙調査を実施した。調査は 2013 年 2 月に行われた。調査対象者のうち、139 名(55.6%)から回答を得た。得られたデータについてクリーニングを行い、最終的に 128 名を分析対象とした。回答者の内訳は、男性 58 名(45.3%)、女性 70 名(54.7%)であり、平均年齢は 73.9 歳(SD=5.7)であった。

### 2. 調査項目

調査項目は、基本属性（性別、年齢、学歴）、社会変数（近所付き合いの頻度、自治会や

町内会への参加に対する積極性、グループ活動への参加の有無)、見守り交流サロンの利用(調査2のみ)、田村・石隈(2001)の被援助志向性尺度【5件法11項目。2つの下位尺度(「援助の欲求と態度」7項目、「援助関係に対する抵抗感の低さ」4項目)からなり、得点範囲はそれぞれ7点から35点、4点から20点である。単純加算により得点化を行い、得点が高いほど被援助志向性が高いことを示す(付録)】などとした。なお、被援助志向性尺度を用いるにあたっては、その尺度項目について社会学を修める大学院生及び研究者3名による検討を行い、尺度の内容的妥当性を確認してこれを用いることとした。

### 3. 分析方法

被援助志向性尺度の尺度得点を従属変数として、必要に応じてそれぞれt検定および分散分析を行った。分析はSPSS 20を用いた。

### 4. 倫理的配慮

調査票表紙に記載した調査協力への依頼文書において、調査の主旨の説明や個人情報およびプライバシーの保護に関する説明、研究協力が自由意思に基づく旨を調査票の表紙に記載し、調査票への回答をもって同意したものとみなした。またデータの分析に際しては、個人が特定されないよう統計的に処理した。



表 1 調査 1 における分析対象者の特徴

属性	回答	N(=158)(%)
性別	男性	41 (25.9)
	女性	117 (74.1)
年齢	65歳-74歳	98 (62.0)
	75歳-84歳	60 (38.0)
学歴	小学校	1 (0.6)
	中学校	15 (9.6)
	高等学校	81 (51.6)
	短期大学・専門学校	28 (17.8)
	大学	30 (19.1)
	大学院	2 (1.3)
近所付き合い	互いに訪問し合う程度	58 (36.7)
	立ち話程度	63 (39.9)
	あいさつ程度	31 (19.6)
	付き合いはない	6 (3.8)
自治会等への参加	とても積極的	11 (7.0)
	積極的	37 (23.4)
	あまり積極的でない	45 (28.5)
	ほとんど参加していない	65 (41.1)
グループ活動	参加あり	116 (73.4)
	参加なし	42 (26.6)

(%は有効回答に占める割合。なお、変数によって合計度数は異なる。)

### Ⅲ. 結果

#### 1. 被援助志向性尺度の検討

##### (1) 項目分析および探索的因子分析の結果

調査 1 の回答結果について被援助志向性尺度の項目分析を行った結果、下位尺度「援助の欲求と態度」に関する 1 項目で天井効果がみられたが、本研究では尺度原版の内容を優先し、この項目は除外せずに分析を続けることとした。次に被援助志向性尺度の探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その際、抽出する因子数は田村・石隈(2001)と同一の 2 因子に固定した。

その結果、下位尺度「援助の欲求と態度」に関する 1 項目と「援助関係に対する抵抗感の低さ」に関する 1 項目の計 2 項目において、2 つの下位尺度のいずれに対しても.30 を上回る因子負荷量を持つことが示された。さらに下位尺度「援助の欲求と態度」に関する 2 項目において、2 つの下位因子のいずれに対しても因子負荷量が.30 を下回ることが示されたが、尺度原版の内容を優先し、かつ因子の解釈可能性も考慮していずれの項目も除外せず、これを採用した（表 2）。なお、因子ごとの男女別および年齢階級別の尺度得点の分布は表 3 の通りであった。

表 2 被援助志向性尺度における探索的因子分析の結果

	1	2	I-T相関
<b>第1因子: 援助の欲求と態度 (<math>\alpha = .72</math>)</b>			
困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人が欲しい。	.80	-.17	.68***
自分が困っているときには、話を聞いてくれる人が欲しい。	.64	-.10	.59***
困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい。	.66	.05	.68***
他人の助言や援助は、あまり役立たないと思っている。(＃)	.35	.49	.65***
今後、自分の周りの人に助けられながら、うまくやっていきたい。	.33	.08	.50***
何事も他人に頼らず、自分で解決したい。(＃)	.28	.17	.56***
自分は、よほどのことがない限り、人に相談することがない。(＃)	.25	.28	.60***
<b>第2因子: 援助関係に対する抵抗感の低さ (<math>\alpha = .74</math>)</b>			
他人からの助言や援助を受けすることに、抵抗がある。(＃)	-.04	.85	.86***
自分は、人に相談したり援助を求めるとき、いつも心苦しさを感ずる。(＃)	-.28	.74	.77***
人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。(＃)	.04	.52	.67***
自分が困っているとき、周りの人には、そっとしておいて欲しい。(＃)	.35	.50	.68***
<b>因子間相関</b>			
	1	2	
	-.29	—	

\*\*\* p<.001、(＃)は逆転項目

表 3 下位因子ごとの男女別および年齢階級別の尺度得点の分布

	年齢(N)	援助の欲求と態度 (平均得点±標準偏差)	援助関係に対する抵抗感の低さ (平均得点±標準偏差)
男性	65歳-74歳(30)	21.30±4.55	12.57±3.31
	75歳-84歳(11)	22.09±6.16	12.55±3.14
	全体(41)	21.51±4.96	12.56±3.23
女性	65歳-74歳(68)	23.66±4.60	12.97±3.55
	75歳-84歳(49)	24.35±4.49	12.10±3.44
	全体(117)	23.95±4.55	12.61±3.51
男女	全体(158)	23.32±4.77	12.59±3.43

## (2) 信頼性

調査 1 の結果について、田村・石隈(2001)による因子分析の結果に沿う形で下位因子ごとに信頼性係数（クロンバックの  $\alpha$  係数）を算出した結果、第 1 因子「援助の欲求と態度」で  $\alpha=.71$ 、第 2 因子「援助関係に対する抵抗感の低さ」で  $\alpha=.74$  となり、いずれの因子についても一定の信頼性が示された。一方、調査 2 の結果について調査 1 と同様の方法により信頼性係数を算出した結果、第 1 因子では  $\alpha=.70$ 、第 2 因子では  $\alpha=.51$  となり、第 2 因子において「信頼性係数が高い」（松井, 2010）とされる  $\alpha=.60$  を下回る結果となった。

## (3) 基準関連妥当性

調査 2 の調査対象者における、団地内の「見守り交流サロン」の利用者と非利用者それぞれの被援助志向性尺度における下位尺度得点の比較を行ったところ、「援助の欲求と態度」においては有意に高い得点にある傾向が示され( $t(108)=2.0, p<.10$ )、「援助関係に対する抵抗感の低さ」においては利用者に有意に高い得点となった( $t(108)=2.9, p<.01$ )、(表 4)。この結果から、見守り交流サロンの利用者で援助の欲求と態度が高い傾向があり、また利用者で援助関係に対する抵抗感が低いことが示された。

表 4 被援助志向性尺度の見守り交流サロン利用・非利用者間での得点の比較

見守り交流サロン(N)	援助の欲求と態度			援助関係に対する抵抗感の低さ		
	平均	標準偏差	t値(df)	平均	標準偏差	t値(df)
利用者(60)	20.7	5.4	2.0 <sup>†</sup>	12.1	3.3	2.9**
非利用者(50)	18.8	4.5	(108)	10.4	2.8	(108)

<sup>†</sup>p<.10, \*\*p<.01

## 2. 被援助志向性尺度における下位尺度得点の基本属性による比較

次に、調査 1 における回答結果について、基本属性による被援助志向性尺度の下位尺度得点の比較を行った。はじめに、被援助志向性尺度の下位尺度それぞれについて男女間で得点の比較を行ったところ、「援助の欲求と態度」のみ、女性において有意に高い得点となった( $t(156)=-2.9, p<.01$ )。次に、被援助志向性尺度の下位尺度それぞれについて前期高齢者(65歳以上、74歳未満)と後期高齢者(75歳以上)の間で得点の比較を行ったところ、いずれも有意な差はみられなかった。さらに被援助志向性尺度の下位尺度それぞれについて、学歴が「中卒以下」、「高卒」「短大卒以上」の3群で1要因分散分析を行ったところ、「援助の欲求と態度」( $F(2,154)=2.7, p<.10$ )、「援助関係に対する抵抗感の低さ」( $F(2,154)=3.0, p<.10$ )のいずれも有意傾向がみられた(表5)。

表 5 被援助志向性尺度における下位尺度の基本属性の違いによる得点の比較

	援助の欲求と態度			援助関係に対する抵抗感の低さ		
	平均	標準偏差	t(F)値(df)	平均	標準偏差	t(F)値(df)
性別(N)						
男 (41)	21.5	5.0	-2.9**	12.6	3.2	-0.1
女 (117)	24.0	4.6	(156)	12.6	3.5	(156)
年齢(N)						
65歳-74歳 (98)	23.0	4.7	-1.3	12.9	3.5	1.2
75歳-84歳 (60)	23.9	4.9	(156)	12.2	3.4	(156)
学歴(N)						
中卒以下 <sup>a</sup> (16)	25.9	5.0	2.7 <sup>†</sup>	10.8	3.6	3.0 <sup>†</sup>
高卒 <sup>b</sup> (81)	23.0	4.3	(2,154)	13.0	3.3	(2,154)
短大卒以上 <sup>c</sup> (80)	23.1	5.1		12.6	3.4	a<b*

<sup>†</sup>p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01

### 3. 被援助志向性尺度における下位尺度得点の、社会変数による比較

さらに調査 1 における回答結果について、社会変数による被援助志向性尺度の下位尺度得点の比較を行った。まず、被援助志向性尺度の下位尺度それぞれについて、近所付き合いの程度が「互いに訪問する程度の人がいる」、「立ち話をする程度の人がいる」、「あいさつをする程度の人がいる」、「付き合いはない」の 4 群で 1 要因分散分析を行ったところ、「援助の欲求と態度」のみ有意差が見られた( $F(3,154)=2.9, p<.05$ )。また多重比較 (Tukey 法) によるその後の検定を行ったところ、「互いに訪問する程度の人がいる」者で、「付き合いはない」者より有意に高い得点となった。

次に、自治会や町内会への参加に対する積極性が「とても積極的に参加している」、「積極的に参加している」、「あまり積極的に参加していない」、「ほとんど参加していない」の 4 群で 1 要因分散分析を行ったところ、「援助の欲求と態度」のみ有意差が見られた ( $F(3,155)=2.8, p<.05$ )。また多重比較 (Tukey 法) によるその後の検定を行ったところ、「とても積極的に参加している」者で、「あまり積極的に参加していない」者より有意に高い得点となった。さらに、被援助志向性尺度の下位尺度それぞれについてグループ活動への参加をしている者としていない者の間で得点の比較を行ったところ、「援助関係に対する抵抗感の低さ」のみ、参加をしている者において有意に高い得点となった( $t(157)=3.0, p<.01$ ) (表 6)。

表 6 被援助志向性尺度における下位尺度得点の社会変数による得点の比較

	援助の欲求と態度			援助関係に対する抵抗感の低さ		
	平均	標準偏差	t(F)値(df)	平均	標準偏差	t(F)値(df)
近所付き合い(N)						
互いに訪問する程度 <sup>a</sup> (58)	24.4	4.8	2.9* (3,154) a>d*	12.5	3.5	0.4 (3,154)
立ち話程度 <sup>b</sup> (63)	22.7	4.7		12.8	3.6	
あいさつ程度 <sup>c</sup> (31)	23.3	4.7		12.8	3.1	
付き合いはない <sup>d</sup> (6)	19.2	2.6		11.2	2.5	
自治会や町内会(N)						
とても積極的 <sup>a</sup> (11)	26.2	4.1	2.8* (3,154) a>c*	14.3	3.6	1.7 (3,154)
積極的 <sup>b</sup> (37)	24.0	4.6		13.1	2.9	
あまり積極的でない <sup>c</sup> (45)	22.0	4.1		12.1	3.3	
ほとんど参加なし <sup>d</sup> (65)	23.3	5.2		12.4	3.7	
グループ活動(N)						
参加あり(116)	23.5	5.1	1.1	13.1	3.3	3.0**
参加なし(42)	22.7	3.7	(156)	11.3	3.4	(156)

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

#### IV 考察

##### 1. 被援助志向性尺度の検討

###### (1) 項目分析と因子分析

項目分析や因子分析の結果から、天井効果を持つ項目が含まれていることや因子負荷量の観点から課題のある項目が複数含まれることが示された。高齢者に適用できるより信頼性の高い尺度の作成を目指す上では、新たな尺度の作成も含めた更なる検討が必要であると考えられる。

###### (2) 尺度の信頼性

調査1の回答結果から尺度の信頼性を検討した結果、下位尺度ごとの信頼性係数(クロンバックの $\alpha$ 係数)はいずれも.70を上回り、一定の信頼性を持つことが示された。

### (3) 尺度の妥当性

調査に際して行った尺度項目の内容的妥当性の検討に加え、調査 2 を通じて基準関連妥当性が確認されたことから、元来教師の被援助志向性を測定する目的で作成された「被援助志向性尺度」を高齢者の日常生活における被援助志向性を測定する尺度としても活用できる可能性が示唆された。

## 2. 被援助志向性の基本属性による比較

被援助志向性尺度の下位尺度得点それぞれについて男女間で得点の比較を行ったところ、「援助の欲求と態度」のみ、女性において有意に高い得点となった。Fischer and Turner(1970)をはじめとするメンタルヘルスに関する多くの研究において、男性に比べ「女性の方が心理的問題で援助を受けることに肯定的な態度を示す」(水野・石隈, 1999) ことが示されているが、本研究の結果から、高齢者の日常生活における被援助志向性についてもこれらの先行研究と同様に「男性に比べ、女性は援助に対する肯定的な姿勢を持つ」ことが示されたものと考えられる。ただし、「援助関係に対する抵抗感の低さ」については、男女間に差がみられなかった。このことから、「援助の欲求」と「援助に対する抵抗感」は異なる要因によって生起されるものと推察される。

また前期高齢者と後期高齢者間で得点の比較を行ったところ、いずれの下位尺度においても有意な差は見られなかった。Leaf et al. (1987) は若者と高齢者が中年層に比べてメンタルヘルスに関するサービスを受けない傾向があることを示しているが、青年期から高齢期までの幅広い年齢層を対象とした研究や、高齢者という区分の中での年齢差による比較を行った研究は今日までほとんどなされておらず、水野・石隈(1999)も述べているように年齢差による被援助志向性の違いやその発達的变化については今後さらに調査を重ねる必要があると考えられる。

さらに学歴の違いによる得点の比較を行ったところ、学歴が高くなると「援助の欲求と態度」は低くなり、「援助関係に対する抵抗感」は弱くなる傾向が見られた。この結果は



Tijhuis et al. (1990) による「学歴が高いほど被援助志向性が高い」という報告とは一部異なる結果となった。我が国において学歴と生涯賃金は相関関係にあり、一般労働者においては「学歴が高くなるにつれ生涯賃金も増える」（ユースフル労働統計, 2014）ことから、学歴が高い高齢者は低い高齢者に比べ現在における生活満足度も高いものと推察され、相対的に新たな援助に対する欲求が低くなるものと考えられる。また学歴とパーソナル・ネットワークとの関連について原田(2012)は、「学歴が高い者ほど友人数が多く」、「学歴と所得がパーソナル・ネットワークを広域化する資源である」と述べている。このことを踏まえて考えれば、学歴の高い者は友人にも恵まれる傾向にあり、そうした友人同士での互助関係の形成などを通じて援助関係に対する抵抗感が低減されるものと推察される。

### 3. 被援助志向性の社会変数による比較

被援助志向性尺度の下位尺度得点それぞれについて近所付き合いの程度の違いによる得点の比較を行ったところ、「付き合いのない」者に比べ、「互いに訪問し合う程度」の付き合いがある者で有意に高い得点となった。

また自治会や町内会への参加に対する積極性の違いによる得点の比較においては、「あまり積極的でない」者に比べ、「とても積極的」な者で有意に高い得点となった。

さらに、グループによる自主的な活動の有無による得点の比較においては「グループに参加している」者で有意に高い得点となった。

以上の結果から、近隣住民などとの関係が豊かな者は被援助志向性が高いことが示唆されたと考えられる。パーソナル・ネットワークを通じた他者との繋がり、発展的に周囲との互助的な関係の形成を導くと考えられるが、これらの結果はそれを裏付けるものであったと考えられよう。すなわち、日常生活における他者との関わりの深まりが被援助志向性を高める要因となることを示唆するものであると言える。

#### 4. 今後の課題

田村・石隈(2001)の被援助志向性尺度を高齢者の被援助志向性を測定する尺度として利用することについて一定の信頼性および妥当性が確認されたが、項目分析により天井効果が見られる項目や因子負荷量に問題のある項目が複数確認された。そのため、この尺度を高齢者に対して適切に用いるには、項目の削除や再検討を含め、さらなる検討が必要であると考えられる。また、高齢者が回答することや、今後他の調査に組み込んで活用することを見据えるならば、上述の項目の整理と併せて短縮版の作成も考慮に入れるべきであるといえよう。

さらに、より実生活に即した質問項目による測定が求められることを考慮すれば、援助要請対象として「親類縁者や友人による援助」と「公的機関などによる援助」の両者を想定した尺度の開発が必要であるといえよう。基準関連妥当性の観点からみるに本研究において被援助志向性尺度を使用したことは適切であったと考えられるが、以上の点を踏まえれば、高齢者の日常生活における被援助志向性を測定する新たな尺度の作成が肝要であると言えよう。

本研究は、『技術マネジメント研究』第 13 号に掲載された論文に一部加筆および修正を加えたものである。

## 付録 被援助志向性尺度（田村・石隈，2001）の尺度項目

---

### 1. 援助の欲求と態度（7項目）

- 1 困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい。
- 2 自分が困っているときには、話を聞いてくれる人が欲しい。
- 3 困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人が欲しい。
- 4 自分は、よほどのことがない限り、人に相談することがない。\*
- 5 何事も他人に頼らず、自分で解決したい。\*
- 6 他人の援助や助言は、あまり役立たないと思っている。\*
- 7 今後も、自分の周りの人に助けられながら、上手くやっていきたい。

### 2. 援助関係に対する抵抗感の低さ（4項目）

- 1 自分は、人に相談したり援助を求めるとき、いつも心苦しさを感じる。\*
- 2 他人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。\*
- 3 人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。\*
- 4 自分が困っているとき、周りの人には、そっとしておいて欲しい。\*

---

(\*は逆転項目)

## 第3章

### 研究Ⅱ

#### 短縮版被援助志向性尺度の作成

## I. 問題と目的

研究1において、田村・石隈(2001)の被援助志向性尺度を高齢者に適用するにあたって検討すべき課題が明らかとなった。特に「項目の再検討」と「短縮版の作成」は、以降の高齢者を対象とした調査を実施するに当たって必要不可欠であると考えられる。

まず「項目の再検討」についてであるが、研究1において確認された天井効果を持つ項目や、因子負荷量の状況から複数の因子に対して強い影響を持つ、もしくはいずれの因子にも影響を持たないと判断された項目についての再検討が必要であろう。

また「短縮版の作成」についてであるが、被援助志向性尺度は2因子11項目で構成されており、教師が回答するにあたっての負担は特段大きくないものと考えられる。しかし、質問紙調査などで他の尺度や質問項目と併用することを念頭に置き、かつ高齢者に回答を求める尺度とすることも踏まえると、この項目数であっても負担となりうると考えられる。この項目数であっても負担となりうると考えられる。回答漏れの防止や調査票の回収率向上などの観点からも、やはり短縮版の作成が望ましいと考えられよう。

以上を踏まえ、本研究では被援助志向性尺度の短縮版を作成することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査方法

社会調査会社にモニター登録を行っている65歳から84歳の独居高齢者を対象とする、郵送による自記式質問紙調査を実施した。調査は2014年1月に行われ、161名から回答を得た。得られたデータについてクリーニングを行い、最終的に158名を分析対象とした(表1)。回答者の内訳は、男性41名(25.9%)、女性117名(74.1%)であり、平均年齢は72.7歳(SD:5.8)であった。

なおこのデータは、研究Iにおける調査1と同一のものである。

## 2. 調査項目

調査項目は、基本属性（性別、年齢、学歴）、社会変数（近所付き合いの頻度、自治会や町内会への参加に対する積極性、グループ活動への参加の有無）、被援助志向性尺度などとした。

## 3. 分析方法

被援助志向性尺度への回答結果について天井効果および床効果の確認を行ったのち、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行い、因子負荷量の状況から採用する項目を決定した。その後、短縮版として作成された新たな尺度としての信頼性および妥当性について検討を行った。

信頼性については、因子ごとの信頼性分析（クロンバックの $\alpha$ 係数）と Item-Total 相関分析による内的整合性に関する検討を行った。また妥当性については、原版の被援助志向性尺度との等質性に関する検討を行った。分析は SPSS 20 を用いた。

## 4. 倫理的配慮

調査票表紙に記載した調査協力への依頼文書において、調査の主旨の説明や個人情報およびプライバシーの保護に関する説明、研究協力が自由意思に基づく旨を調査票の表紙に記載し、調査票への回答をもって同意したものとみなした。またデータの分析に際しては、個人が特定されないよう統計的に処理した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 項目分析および探索的因子分析の結果

被援助志向性尺度 11 項目について項目分析を行った結果、下位尺度「援助関係に対する抵抗感の低さ」に関する 1 項目（「今後も、自分の周りの人に助けられながら、うまくやっ

ていきたい) で天井効果が認められた。そのため、この項目を今後の分析からは除外することとした。

次にこの 10 項目について探索的因子分析を行った。その際、抽出する因子数は被援助志向性尺度原版と同一の 2 因子に固定した。その結果、「他人の援助や助言は、あまり役立たないと思っている」、「自分が困っているとき、周りの人には、そっとしておいて欲しい」の 2 項目において、2 つの下位因子のいずれに対しても .30 を上回る因子負荷量を持つことが示された。さらに、「自分は、よほどのことがない限り、人に相談することがない」、「何事も他人に頼らず、自分で解決したい」においては、2 つの下位因子のいずれに対しても因子負荷量が .30 を下回ることが示された。そこでこの 4 項目を除外して再度因子分析を行い、最終的に 2 因子 6 項目 (第 1 因子「援助に対する欲求」、第 2 因子「援助に対する抵抗感」) が抽出されたため、固有値の減衰状況や因子負荷量、および因子の解釈可能性を考慮してこれを採用した (表 1)。

なお短縮版作成に伴い、下位尺度名を以下の通り変更した。まず、原版において「援助の欲求と態度」とされていた下位因子名については、因子分析の過程で質問内容から「態度」を測定するものと推察される項目が全て除外されたため、「援助に対する欲求」とした。また原版において「援助関係に対する抵抗感の低さ」とされていた下位因子名については、逆転項目を設定せずに因子名を「援助に対する抵抗感」とすることで、使用・分析に際しての手続きを簡略化することとした。

## 2. 信頼性と原版との等質性の検討

抽出された 2 因子についてクロンバックの  $\alpha$  係数の算出を行ったところ、「援助に対する欲求」で  $\alpha = .74$ 、「援助に対する抵抗感」で  $\alpha = .72$  となった。また因子の持つ各項目について Item-Total 相関を行ったところ、全ての項目において  $r = .45$  から .89 のいずれも有意な正の相関 ( $p < .001$ ) がみとめられた。なお尺度全体を 1 因子とした際の  $\alpha$  係数は .62 であった。さらに原版と短縮版との等質性について検討を行ったところ、原版と短縮版における第 1

因子および第 2 因子の間にそれぞれ  $r=.80$ 、 $r=.96(p<.001)$  の高い相関が示された。



表 1 2 因子 6 項目を想定した因子分析の結果

	1	2	I-T相関
第1因子: 援助に対する欲求 ( $\alpha = .74$ )			
困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人が欲しい。	.85	-.07	.86***
困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい。	.66	.14	.79***
自分が困っているときには、話を聞いてくれる人が欲しい。	.61	-.03	.77***
第2因子: 援助に対する抵抗感 ( $\alpha = .72$ )			
他人からの助言や援助を受けすることに、抵抗がある。	.07	.85	.89***
自分は、人に相談したり援助を求めるとき、いつも心苦しさを感ずる。	-.13	.73	.80***
人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。	.08	.49	.45***
因子間相関	—	—	
	.05	—	

\*\*\* p<.001

#### IV. 考察

分析の結果から、短縮版被援助志向性尺度が 2 因子 6 項目で構成されることが示された。因子毎の  $\alpha$  係数はそれぞれ .74 と .72 となり、項目数を考慮すれば十分な信頼性を持つと考えられる。また固有値の減衰状況や因子間相関の結果から、短縮版被援助志向性尺度は性質の異なる 2 因子で構成された尺度であると考えられる。6 項目での信頼性係数が .62 となったことを加味しても、尺度の 1 次元性は認められないといえよう。また 11 項目版との等質性の検討から、いずれの因子も高い等質性を持つことが示された。

なお因子分析による項目選択に際し、原版の第 1 因子「援助の欲求と態度」において、質問内容から「態度」を測定するものと推察される項目の持つ因子負荷量が低く、最終的に全ての項目が除外された。この結果は、原版において統合されていた援助の「欲求」と「態度」の 2 側面が、実際は異なる性質を持つものである可能性を示唆する結果であると考えられる。等質性の検定においてはいずれの下位尺度においても高い相関を維持したが、運用の際には原版から援助に対する態度に関する項目が除外されている点について留意する必要があるといえよう。

また本研究では第 1 研究において課題に挙げられた回答者の負担軽減を念頭に、より少ない項目で、かつ高い信頼性を持つ尺度となることを目指した短縮版の作成を実施したが、同じく第 1 研究にて課題に挙げられた「援助要請対象として『親類縁者や友人による援助』と『公的機関などによる援助』の両者を想定」という観点からの尺度作成については未検討であり、この点について引き続き検討を続ける必要があるといえよう。

本研究は、『日本応用心理学会』第 81 回大会にて口頭発表を行ったものに一部加筆および修正を加えたものである。

## 付録 短縮版被援助志向性尺度の尺度項目

---

### 1. 援助に対する欲求（3項目）

- 1 困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人が欲しい。
- 2 困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい。
- 3 自分が困っているときには、話を聞いてくれる人が欲しい。

### 2. 援助に対する抵抗感（3項目）

- 1 他人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。
  - 2 自分は、人に相談したり援助を求めるとき、いつも心苦しさを感じる。
  - 3 人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。
-

## 第4章

### 研究Ⅲ

#### 高齢者用被援助志向性尺度の作成と関連要因の検討

## I. 問題と目的

研究Ⅰにおいては、田村・石隈(2001)の被援助志向性尺度が「高齢者の日常生活における被援助志向性の測定」においても一定の信頼性・妥当性を持つことや、Fischer and Turner(1970)の先行研究と同様に、男性より女性で被援助志向性が高いことが示された。また研究Ⅱでは、回答者の負担軽減を目的として短縮版被援助志向性尺度を作成し、こちらの尺度についても高齢者の日常生活における被援助志向性の測定における信頼性および妥当性が示された。なおすでに述べた通り、この短縮版においては被援助志向性を捉える二つの下位尺度が「援助の欲求と態度」から「援助に対する欲求」、「援助関係に対する抵抗感の低さ」から「援助に対する抵抗感」へとそれぞれ変更された。

従来 of 被援助志向性に関する研究における調査対象者は児童、大学生、教師などが多数を占め、主に家族や親友あるいは同僚などから得られる援助に対する被援助志向性について検討したものが大半であった。しかし、高齢者の被援助志向性について検討する上では、これまで主に検討されてきた家族や友人から得られる援助のみならず、状況によっては行政や専門職者などから得られる援助も考慮した尺度が必要であろう。被援助志向性尺度やその短縮版はこれらに対応する項目が存在せず、高齢者を対象とするには不十分なものであった。

しかし小川ら(2009)の「調査対象としたケアマネージャーの61.1%が援助拒否された経験を持つ」という報告を踏まえれば、高齢者用の尺度を作成する際は「身近な他者」と「公的な他者」、すなわち「家族などの身近な相手からの援助」と「公的機関などからの援助」の両者に対する被援助志向性を幅広く捉えることのできる尺度である必要があると考えられる。「身近な他者」からの援助に加え、「公的な他者」からの援助に関する内容を新たに加えた「高齢者の日常生活における被援助志向性を測定すること」に特化した尺度が作成されれば、その回答から個々に持っている被援助志向性の特徴をよりの確に把握でき、実践的な援助関係を構築する際の有用な手がかりとなるものと考えられる。

また、その尺度をチェックリストなどの形で活用することを見据えるならば、項目数が

少なく短時間での回答が可能なもので、かつ回答結果から今後の援助方略を検討する上で有用な情報が把握できるものが望ましいといえよう。

そこで本研究では既存の被援助志向性尺度およびその短縮版を基に「高齢者用被援助志向性尺度(Help-seeking Preference Scale for Elderly, HPS-E)」を作成し、その信頼性と妥当性を検討するとともに、独居高齢者の被援助志向性の関連要因についても検討することを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 高齢者用被援助志向性尺度原案の作成

高齢者用被援助志向性尺度の原案は、既存の短縮版被援助志向性尺度（2因子6項目）を基に、新たに項目を追加することにより作成した。

短縮版被援助志向性尺度は本論文の研究Ⅱにおける田村・石隈の被援助志向性尺度の再検討を通じ、回答者への負担低減の観点から被援助志向性尺度の項目の一部を使用して高橋らが再構成したものであり、被援助志向性を捉える2つの下位尺度（欲求・抵抗感）を想定した尺度である。

追加する項目は、短縮版被援助志向性尺度に含まれていなかった「行政や専門職者などから得られる援助」に関するものとした。新たな項目の選定にあたっては、心理学を修める大学院生1名が既存の尺度項目などを参考に作成した6つの質問項目案について、社会学および社会老年学を修める研究者2名を加えた計3名による協議を通じて内容的妥当性を確認した。

その結果、6つの項目案全てを「行政や専門職者などから得られる援助」に関する質問項目（「援助に対する欲求」および「援助に対する抵抗感」各3項目）として加えた12項目をもって高齢者用被援助志向性尺度の原案とした。回答形式は短縮版被援助志向性尺度に準拠し、「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法とした。

## 2. 調査方法

調査は2014年12月より2015年1月にかけて、郵送法により実施された。対象者の選定は、首都圏に位置するA市に居住する65歳から79歳の高齢者のうち、住民基本台帳によりひとり暮らしであると推定される者を性別（男女）・年齢階級（5歳刻み）別にそれぞれ30名、対象地点ごとに180名を抽出することによって行った。

抽出する地点の選択は対象人口による等間隔抽出によって決定したが、当初予定していたA市内10地点のうち、1地点での抽出作業が遂行できなかったため、最終的に抽出されたのは9地点、1620名であった。抽出された1620名に対して調査票を郵送し、671名（回収率41.4%）より回答を得た。

また郵送調査とは別に、2015年5月、2015年9月の2度にわたる健康調査に参加した50歳から79歳の中高齢者43名に郵送調査と同一の調査票を2度配布し、集合調査法による回答を依頼した。この調査で得られたデータは、新たに作成した尺度の信頼性を再テスト法によって検討する際に用いた。

## 3. 調査項目

調査では、高齢者用被援助志向性尺度原案、基本属性に関する質問（①年齢・②性別・③学歴・④現在の配偶関係・⑤就業の有無・⑥暮らし向き・⑦居住形態）、社会関係に関する質問（⑧近所付き合いの程度・⑨別居子家族と会う頻度・⑩友人と会う頻度・⑪グループ活動への参加の有無・⑫自治会などへの参加の程度・⑬ひとり暮らし年数）、からだの状態に関する質問（⑭日常生活における移動能力、⑮主観的健康感、⑯介護サービスの利用）について尋ねた。

基本属性に関する質問項目において、学歴については最終卒業学校として回答のあった校種に基づく標準的な就学年数に換算した。暮らし向きについては経済状況に関する主観的評価について5件法（「大変ゆとりがある」～「大変苦しい」）による回答を求めた。また現在の配偶関係については4件法（いる・離別・死別・未婚）による回答を求めたのち

に、「いる」と「いない」の2つの選択肢に整理した。居住形態についても「一戸建て持家」や「賃貸マンション」などの8件法による回答を求めたのちに、「持ち家」と「賃貸」の2つの選択肢に整理した。

社会関係に関する質問項目においては、近所付き合いについて4件法（「互いに訪問し合う程度」～「つきあいはない」）で、別居子家族と会う頻度および友人と会う頻度について9件法（「まったくない」～「週に6、7回（ほぼ毎日）」、該当者が「いない」）で、グループ活動への参加については2件法（「参加している」と「参加していない」）で、自治会などへの参加の程度については4件法（「とても積極的に参加している」～「ほとんど参加していない」）でそれぞれ尋ねた。

からだの状態に関する質問においては、日常生活における移動能力について5件法（「自転車、車、バス、電車を使ってひとりで外出できる」～「寝たきりまたは、寝たり起きたり」）による回答を求めた。主観的健康感については4件法（「良い」～「良くない」）による回答を求めたのち、「良い」と「良くない」の2つの選択肢に整理した。介護サービスの利用についても、現時点における利用頻度を6件法（「毎日」～「利用していない」）による回答を求めたのち、「利用している」と「利用していない」の2つの選択肢に整理した。

#### 4. 分析方法

分析を行うに先立って671名の回答についてデータクリーニングを実施し、分析対象者を新たに作成する尺度原案の全項目に回答した602名（男性300名、女性302名。平均年齢71.9歳、SD:4.2）とした（表1）。

##### (1) 尺度作成と信頼性・妥当性の検証手順

高齢者用被援助志向性尺度原案への回答を基に、尺度の因子数および尺度項目の決定と、尺度としての信頼性および妥当性の検討を行った。すなわち、高齢者用被援助志向性尺度の尺度原案12項目について天井効果および床効果の確認を行ったのち、探索的因子分析(最



尤法・プロマックス回転) を行い、採用する項目を決定した。その後、新たな尺度としての信頼性および妥当性について検討を行った。信頼性については、下位尺度ごとの信頼性分析(クロンバックの $\alpha$ 係数)、Item-Total 相関分析による内的整合性および再テスト法による尺度としての安定性に関する検討を行った。また妥当性については、実際の介護サービス利用者と非利用者間での尺度得点の比較により基準関連妥当性を検討することで確認した。

## (2) 被援助志向性の関連要因の分析手順

各下位尺度得点を従属変数、性別・年齢・学歴・現在の配偶関係・就業の有無・暮らし向き・居住形態・近所付き合いの程度・別居子家族と会う頻度・友人と会う頻度・グループ活動への参加の有無・自治会などへの参加の程度・ひとり暮らし年数・日常生活における移動能力・主観的健康感の 15 項目を独立変数とする重回帰分析を行い、それぞれの因子に対する関連要因となる変数について検討を行った。分析には、いずれも SPSS20 for Windows を用いた。

## 5. 調査に係る倫理的配慮

調査票表紙に記載した調査協力への依頼文書において、調査の主旨の説明や個人情報およびプライバシーの保護に関する説明、研究協力が自由意思に基づく旨を調査票の表紙に記載し、調査票への回答をもって同意したものとみなした。またデータの分析に際しては、個人が特定されないよう統計的に処理した。

表 1 分析対象者の特徴

属性	回答	N(=602)(%)
性別	男性	300 (49.8)
	女性	302 (50.2)
年齢	65-69	193 (32.1)
	70-74	221 (36.7)
	75-79	188 (31.2)
学歴	小学校	2 (0.4)
	中学校	110 (18.7)
	高等学校	271 (46.0)
	短期大学・専門学校	75 (12.7)
	大学	118 (20.0)
	大学院	7 (1.2)
	その他	6 (1.0)
配偶関係	有	19 (3.2)
	無	580 (96.8)
就業	有	175 (29.3)
	無	422 (70.7)
住居の種類	持ち家	355 (60.4)
	賃貸	233 (39.6)
暮らし向き	大変苦しい	45 (7.6)
	やや苦しい	92 (15.6)
	普通	351 (59.5)
	ややゆとりがある	79 (13.4)
	大変ゆとりがある	23 (3.9)
主観的健康感	良い	468 (77.9)
	良くない	133 (22.1)
介護サービス	利用	40 (6.9)
	非利用	543 (93.1)

(%は有効回答に占める割合。なお、変数によって合計度数は異なる。)

### Ⅲ. 結果

#### 1. 高齢者用被援助志向性尺度の検討

##### (1) 項目分析および探索的因子分析の結果

新たに加えた質問項目を含む 12 項目について項目分析を行った結果、いずれの項目にも床効果は見られなかったが、新たに追加した「援助に関する抵抗感」に関する 1 項目について、天井効果が認められた（平均値 3.94、SD=1.24）。そのため、この 1 項目を今後の分析からは除外することとした。

そこで、尺度原案 11 項目について探索的因子分析を行った。その際、抽出する因子数は短縮版被援助志向性尺度と同一の 2 因子に固定した。2 因子を採用した理由としては、尺度原案作成にあたって追加した項目がいずれも「援助に対する欲求」および「援助に対する抵抗感」のどちらかの概念に含まれることを想定したものであるためであった。

その結果、既存の「援助に関する抵抗感」に関する 1 項目について、2 つの因子に対してほぼ同程度の因子負荷量を持つことが示された。そこでこの 1 項目を除外して再度因子分析を行い、最終的に 2 因子 10 項目（第 1 因子「援助に対する欲求」6 項目、第 2 因子「援助に対する抵抗感」4 項目）が抽出されたため、因子の解釈可能性も考慮してこれを採用した（表 2）。

表 2 高齢者用被援助志向性尺度における探索的因子分析の結果

	1	2	I-T相関
第1因子: 援助に対する欲求 ( $\alpha = .83$ )			
困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる身近な人が欲しい。	.73	.17	.78***
困っていることを解決するために、身近な人からの助言や援助が欲しい。	.70	.05	.75***
困っていることを解決するために、行政からの助言や援助が欲しい。	.69	-.09	.76***
自分が困っているときには、行政にも相談にのってほしい。	.67	-.10	.74***
自分が困っているときには、話を聞いてくれる身近な人が欲しい。	.67	.15	.73***
困っていることを解決するためには、進んで行政の手を借りたい。	.61	-.17	.69***
第2因子: 援助に対する抵抗感 ( $\alpha = .70$ )			
公的な支援に頼ることは、恥ずかしいことだと思う。	.02	.74	.79***
公的な機関からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	-.12	.74	.75***
身近な人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	-.01	.53	.74***
人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。	.16	.37	.62***
因子間相関	1	2	
	—	.01	

\*\*\*  $p < .001$

## (2) 信頼性と妥当性の検討

抽出された 2 因子についてクロンバックの  $\alpha$  係数の算出を行ったところ、「援助に対する欲求」で  $\alpha=.83$ 、「援助に対する抵抗感」で  $\alpha=.70$  となった。次に因子の持つ各項目について Item-Total 相関を行ったところ、全ての項目において  $r=.62$  から  $.79$  のいずれも有意な正の相関 ( $p<.001$ ) がみとめられた。

また、郵送調査とは別に実施した 2 度の健康調査のいずれにも参加し、かつ尺度原案の全項目に回答した 28 名（男性 2 名、女性 26 名。平均年齢 65.3 歳、SD:6.4）のデータを用いて再テスト法による検討を行ったところ、各因子における級内相関係数は、第 1 因子「援助に対する欲求」で  $r=.71(p<.001)$ 、第 2 因子「援助に対する抵抗感」で  $r=.79(p<.001)$  となり、いずれの因子についても尺度得点の間に強い相関がみとめられた。

さらに基準関連妥当性を検討すべく、介護サービスの利用者と非利用者で下位尺度ごとに尺度得点の平均の比較を行ったところ、「援助に対する欲求」においては利用者で  $21.63 \pm 6.62$ 、非利用者では  $19.25 \pm 5.58$  となり、利用者に有意に高い得点となった ( $t(583)=2.6$ ,  $p<.05$ )。また「援助に対する抵抗感」においては利用者で  $9.88 \pm 3.42$ 、非利用者では  $11.00 \pm 3.50$  となり、非利用者に有意に高い得点となった ( $t(583)=-2.0$ ,  $p<.05$ )。

なお、下位尺度ごとの男女別および年齢階級別の尺度得点の分布は表 3 の通りであり、性別と年齢の 2 要因分散分析の結果、「援助に対する抵抗感」においてのみ性別による主効果がみられた ( $F(1, 596)=20.04$ ,  $p<.001$ )。

表 3 下位尺度ごとの男女別および年齢階級別の尺度得点の分布

年齢(N)		援助に対する欲求 (平均得点±標準偏差)	援助に対する抵抗感 (平均得点±標準偏差)
男性	65歳-69歳(102)	18.75±5.83	11.72±3.55
	70歳-74歳(112)	19.36±5.09	11.75±3.46
	75歳-79歳(86)	19.58±6.07	11.10±3.69
	全体(300)	19.21±5.63	11.55±3.56
女性	65歳-69歳(91)	18.63±5.94	9.97±3.52
	70歳-74歳(109)	19.48±5.50	10.68±3.34
	75歳-79歳(102)	20.15±5.85	10.12±3.24
	全体(302)	19.45±5.77	10.27±3.37
男女	全体(602)	19.33±5.70	10.91±3.52

## 2. 被援助志向性の関連要因の検討

重回帰分析の結果は、表 4 の通りであった。まず「援助に対する欲求」について、重相関係数( $R$ )は.262( $p<.01$ )、調整済み決定係数( $R^2$ )は.042 となった。投入した独立変数のうち、暮らし向き( $p<.05$ )、日常生活における移動能力( $p<.01$ )で有意な関連が認められ、主観的健康感では有意な関連の傾向( $p<.10$ )が認められた。すなわち、暮らし向きが良くないと自己評価した者、日常生活における移動能力の低い者、主観的健康感について良くないと評価した者で尺度得点が高く、援助に対する欲求が高いことが示された。

次に「援助に対する抵抗感」について、重相関係数( $R$ )は.346( $p<.001$ )、調整済み決定係数( $R^2$ )は.095 となった。投入した独立変数のうち、性別( $p<.05$ )、現在の配偶関係( $p<.05$ )、暮らし向き( $p<.05$ )、近所付き合いの程度( $p<.001$ )、グループ活動への参加の有無( $p<.05$ )で有意な関連が認められ、学歴では有意な関連の傾向( $p<.10$ )が認められた。すなわち、男性、有配偶の者、暮らし向きが良くないと自己評価した者、近所付き合いの程度が低い者、グループ活動に参加していない者、学歴の低い者で尺度得点が高く、援助に対する抵抗感が強いことが示された。

表4 下位尺度ごとの重回帰分析の結果

説明変数	援助に対する欲求(N=546)		援助に対する抵抗感(N=546)	
	標準偏回帰係数(β)	相関係数(r)	標準偏回帰係数(β)	相関係数(r)
性別(→女性)	-.023	.001	-.100*	-.181**
年齢	.039	.078	.033	-.032
学歴(就学年数換算)	-.073	-.102*	-.077†	-.069
現在の配偶関係(→無)	-.059	-.020	-.086*	-.110*
就業の有無(→有)	-.069	-.094*	.012	.044
暮らし向き(→大変ゆとりがある)	-.106*	-.129**	-.092*	-.165**
居住形態(→賃貸)	.028	.062	-.063	.090*
近所づきあいの程度(→程度少)	-.023	-.025	.204**	.275**
別居子家族と会う頻度(→頻度少)	.044	.015	-.012	.077†
友人と会う頻度(→頻度少)	-.055	-.045	.005	.139**
グループ活動への参加の有無(→参加していない)	-.045	-.043	.106**	.194**
自治会などへの参加の有無(→参加していない)	-.069	-.045	.006	.167**
ひとり暮らし年数	-.012	.013	-.015	.059
日常生活における移動能力(→能力低)	.117**	.138**	-.025	.011
主観的健康感(→良くない)	.081†	.124**	.017	.068
重相関係数	.262**		.346**	
自由度調整済みR2	.042		.095	

† p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01

#### IV. 考察

本研究の目的は、従来の被援助志向性尺度およびその短縮版を基にした高齢者用被援助志向性尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討するとともに、独居高齢者の被援助志向性の関連要因について検討することであった。

##### 1. 高齢者用被援助志向性尺度の作成

2 因子 12 項目を想定して作成した尺度原案について探索的因子分析を行った結果、2 項目が除外され、最終的に 2 因子 10 項目から成る尺度が作成された。その後尺度の信頼性や安定性を確認すべく、各下位尺度における信頼性分析、Item-Total 相関および再テスト法による級内相関係数の検討を行った結果、いずれについても十分な信頼性を示す値を得た。

さらに妥当性については、事前に行った内容的妥当性の検討に加え、介護サービスの利用の有無を基準とする基準関連妥当性の側面からの検討を行った。その結果、サービス利用者で「援助に対する欲求」の尺度得点が有意に高く、サービス非利用者で「援助に対する抵抗感」の尺度得点が有意に高いことが示された。

以上の結果から、新たな尺度には一定の信頼性および妥当性が確認できたものと考えられる。信頼性および妥当性が確認されたため、今後の調査における利用が期待される。特に、従来の被援助志向性尺度では測定できなかった行政などからの援助を受けることに対する志向性についても検討が可能である点に、新たに作成した尺度の有用性があるといえよう。

この尺度を「高齢者のもつ被援助志向性を援助に対する欲求と抵抗感の観点から幅広く把握するツール」として活用することで、援助が必要と思われる高齢者に対して援助者が援助関係の構築を試みる際、2 つの下位尺度の得点から対象者を 4 タイプ（援助に対する欲求の高低×援助に対する抵抗感の強弱）に分類することで、具体的な方略を模索する際の手がかりを得られると考えられる（図 1）。また 10 項目という少ない項目数であるため、広く一般に用いるチェックリストとしての活用も想定でき、短時間で回答者が自分の持つ



ている「援助を受けることに対する考え方」について再考する機会を提供できると考えられる。

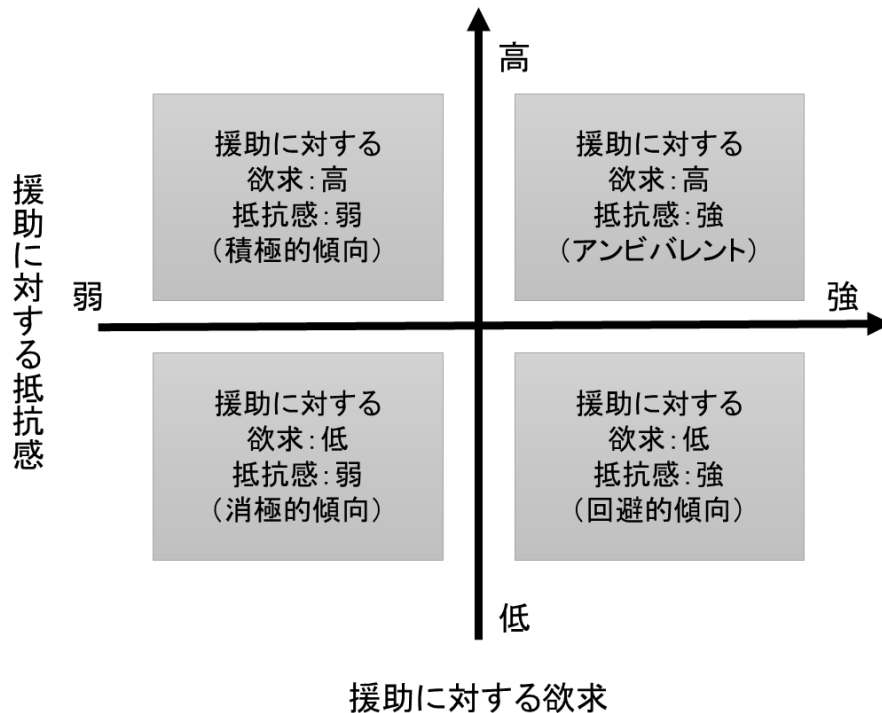


図1 高齢者用被援助志向性尺度の下位尺度得点によるタイプ分類

## 2. 独居高齢者における被援助志向性の関連要因の検討

下位尺度ごとにその尺度得点を従属変数とする重回帰分析を行ったところ、「援助に対する欲求」については暮らし向きおよび日常生活における移動能力で、「援助に対する抵抗感」については性別、配偶関係、暮らし向き、近所付き合いの程度およびグループ活動への参加の有無でそれぞれ有意な関連が認められた。

「援助に対する欲求」と「援助に対する抵抗感」の両者に対して暮らし向きが有意な影響を与えており、「援助を受けることへの欲求がある一方で、他者から援助を受けることや援助関係を持つことには抵抗を感じる」という、援助を受けることに対するアンビバレントな態度をもつ高齢者の存在を示唆した結果といえよう。このような態度には、援助によって暮らし向きにかかる問題（貧困や債務など）が解決するかもしれないという期待と、

水野ら(2006)が指摘する援助不安(暮らし向きにかかわる相談を行うことによる汚名の心配や呼応性の心配)の両者による影響が考えられる。

「援助に対する欲求」において日常生活における移動能力で有意な関連がみられたことは、援助欲求が移動能力の低下に伴って生起されることを示唆する重要な知見である。一方、「援助に対する抵抗感」においては主に社会関係で有意な関連がみられた。この結果は周囲との社会的なつながりに乏しい独居高齢者は援助を受けることに対する抵抗感が高いことを示すものであり、社会的なつながりに乏しい人や援助を受けることに対するアンビバレントな態度を持つ人でも抵抗なく気軽に利用できるプラットフォーム開発の必要性が示唆された結果である。

さらに「援助に対する抵抗感」にのみ性別や配偶関係といったデモグラフィック変数による有意な影響がみられ、女性より男性で援助に対する抵抗感が強いことや、現在配偶者のいる高齢者で抵抗感が強いことが示唆された。男性より女性で被援助志向性が高いという結果は水野・石隈(1999)によるレビュー論文などでも言及されているが、今回の結果は被援助志向性の因子の中でも「援助に対する抵抗感」において女性よりも男性で高いことを示すものであり、これらの先行研究と同様の傾向が明らかになった。

また配偶者のいる高齢者で抵抗感が高かったことについて、高橋(2015)は高齢者が「支援の必要が生じた際に援助要請を行う対象」として家族や親戚を選ぶ傾向が高いことを示しているほか、国内外の先行研究(Offer et. al. (1991)、Deane et. al. (2001)、與久田, 2011)においても援助要請の対象として「身近な対象が最も好まれる」との報告があり、何らかの理由で離れて暮らす配偶者がいる独居高齢者はまず配偶者に援助要請を行うものと推察される。そのため、配偶者のいる高齢者は、「身近にいる援助者である配偶者を敢えて頼らずに行政へ援助を要請する」ことには抵抗感があるものと考えられる。

以上のように、重回帰分析モデルとしては「援助に対する欲求」、「援助に対する抵抗感」とも有意であり、いずれのモデルにおいても影響を与える要因として想定したもののうち複数有意であることが示された。しかし、両モデルとも決定係数が低いためどの要因

も強い影響があるとは言い切れず、投入した独立変数以外の要因が関与している可能性が推察される。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究の対象者は首都圏に暮らす独居高齢者であったので、新たに作成した尺度の信頼性および妥当性は限定的に考えるべきであろう。今後は、他の居住形態にある高齢者、地方に居住する高齢者などを対象に検討する研究が必要であろう。また基準関連妥当性の検証は、今回使用した介護サービスの有無以外の外的基準からの検討を重ねることで、より尺度の妥当性が明確に示されるものと考えられる。

また本研究の枠組みでは、援助に対する抵抗感と社会的なつながりの乏しさに関連があることまでは示されたものの、その因果関係までは特定できなかった。「援助に対する抵抗感が高い独居高齢者は周囲との社会的な繋がりを結ばない傾向にある」のか、「あるいは社会的なつながりに乏しい高齢者が他者との援助の授受関係を持つことに抵抗を感じてしまっている」のかという点については、今後検討の余地があるといえよう。

さらに、「援助に対する欲求」、「援助に対する抵抗感」それぞれに関連する要因については、重回帰分析の結果から今回想定した変数以外の影響が考えられる。この点についても今後検討すべきであり、今回用いなかった変数を今後の調査で新たに投入するなどの検討を続ける必要があるだろう。

本研究は、『老年社会科学』に投稿（査読中）したものに一部加筆および修正を加えたものである。

## 付録 高齢者用被援助志向性尺度の尺度項目

---

### 1. 援助に対する欲求（6項目）

- 1 困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる身近な人が欲しい。
- 2 困っていることを解決するために、身近な人からの助言や援助が欲しい。
- 3 自分が困っているときには、話を聞いてくれる身近な人が欲しい。
- 4 困っていることを解決するために、行政からの助言や援助が欲しい。
- 5 自分が困っているときには、行政にも相談にのってほしい。
- 6 困っていることを解決するためには、進んで行政の手を借りたい。

### 2. 援助に対する抵抗感（4項目）

- 1 身近な人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。
  - 2 人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。
  - 3 公的な支援に頼ることは、恥ずかしいことだと思う。
  - 4 公的な機関からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。
-

## 第 5 章

### 研究Ⅳ

高齢者用被援助志向性尺度における信頼性および妥当性の再検討

## I. 問題と目的

研究Ⅲにおいては、短縮版被援助志向性尺度に新たに項目を加えた高齢者用被援助志向性尺度を作成し、その信頼性および妥当性およびその関連要因について検討を行った。これらの検討を通じて、高齢者用被援助志向性尺度が一定の信頼性および妥当性をもつ尺度であることが確認された。

本研究では、研究Ⅲにて作成された高齢者用被援助志向性尺度を新たに抽出した異なるサンプルを対象に用いて再度調査および分析を行うことで、尺度としての安定性などについて検討することを目的とした。

## II. 方法

### 1. 「高齢者用被援助志向性尺度」の再検討

本研究では、「高齢者用被援助志向性尺度」の尺度としての安定性を検討すべく、研究Ⅲにおける調査とは異なるサンプルを対象とする調査を実施した。その後、得られたデータに対して調査Ⅲと同一の手順による分析を行い、その結果を比較することとした。

### 2. 調査方法

調査は2016年7月より8月にかけて、郵送法により実施された。対象者の選定は、首都圏に位置するA市に居住する65歳から79歳の高齢者のうち、住民基本台帳によりひとり暮らしであると推定される者を性別（男女）・年齢階級（5歳刻み）別にそれぞれ対象地点ごとに500名を抽出することによって行った。なお、抽出する地点はA市内3地点とした。抽出された1500名に対して調査票を郵送し、622名（回収率41.5%）より回答を得た。

### 3. 調査項目

調査では、高齢者用被援助志向性尺度原案、基本属性に関する質問（①年齢・②性別・

③学歴・④現在の配偶関係・⑤就業の有無・⑥暮らし向き・⑦居住形態)、社会関係に関する質問(⑧近所付き合いの程度・⑨別居子家族と会う頻度・⑩友人と会う頻度・⑪グループ活動への参加の有無・⑫自治会などへの参加の程度・⑬ひとり暮らし年数)、からだの状態に関する質問(⑭日常生活における移動能力、⑮主観的健康感、⑯介護サービスの利用)について尋ねた。

基本属性に関する質問項目において、学歴については最終卒業学校として回答のあった校種に基づく標準的な就学年数に換算した。暮らし向きについては経済状況に関する主観的評価について5件法(「大変ゆとりがある」～「大変苦しい」)による回答を求めた。また現在の配偶関係については4件法(いる・離別・死別・未婚)による回答を求めたのちに、「いる」と「いない」の2つの選択肢に整理した。居住形態についても「一戸建て持家」や「賃貸マンション」などの8件法による回答を求めたのちに、「持ち家」と「賃貸」の2つの選択肢に整理した。

社会関係に関する質問項目においては、近所付き合いについて4件法(「互いに訪問し合う程度」～「つきあいはない」)で、別居子家族と会う頻度および友人と会う頻度について9件法(「まったくない」～「週に6、7回(ほぼ毎日)」、該当者が「いない」)で、グループ活動への参加については2件法(「参加している」と「参加していない」)で、自治会などへの参加の程度については4件法(「とても積極的に参加している」～「ほとんど参加していない」)でそれぞれ尋ねた。

からだの状態に関する質問においては、日常生活における移動能力について5件法(「自転車、車、バス、電車を使ってひとりで外出できる」～「寝たきりまたは、寝たり起きたり」)による回答を求めた。主観的健康感については4件法(「良い」～「良くない」)による回答を求めたのち、「良い」と「良くない」の2つの選択肢に整理した。介護サービスの利用についても、現時点における利用頻度を6件法(「毎日」～「利用していない」)による回答を求めたのち、「利用している」と「利用していない」の2つの選択肢に整理した。

なお以上の質問項目は、研究Ⅲにおける調査のものと同一である。

#### 4. 分析方法

分析を行うに先立って 622 名の回答についてデータクリーニングを実施し、分析対象者を高齢者用被援助志向性尺度の全項目に回答した 581 名（男性 255 名、女性 325 名、無回答 1 名。平均年齢 72.2 歳、SD:4.0）とした（表 1）。

続いて研究Ⅲの手順に則り、以下の方法で分析を行った。

##### (1) 信頼性・妥当性の検証手順

研究Ⅲと同一の手順により、尺度としての信頼性および妥当性の検討を行った。すなわち、高齢者用被援助志向性尺度 10 項目について天井効果および床効果の確認を行ったのち、抽出因子数を 2 とする探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。

その後信頼性については、因子ごとの信頼性分析（クロンバックの  $\alpha$  係数）、Item-Total 相関分析による内的整合性に関する検討を行った。また妥当性については、実際の介護サービス利用者と非利用者間での尺度得点の比較により基準関連妥当性を検討することで確認した。

##### (2) 被援助志向性の関連要因の分析手順

下位尺度ごとの尺度得点を従属変数、性別・年齢・学歴・現在の配偶関係・就業の有無・暮らし向き・居住形態・近所付き合いの程度・別居子家族と会う頻度・友人と会う頻度・グループ活動への参加の有無・自治会などへの参加の程度・ひとり暮らし年数・日常生活における移動能力・主観的健康感の 15 項目を独立変数とする重回帰分析を行い、それぞれの下位尺度に対する関連要因となる変数について検討を行った。分析には、いずれも SPSS20 for Windows を用いた。

#### 5. 調査に係る倫理的配慮

調査票表紙に記載した調査協力への依頼文書において、調査の主旨の説明や個人情報お



よびプライバシーの保護に関する説明、研究協力が自由意思に基づく旨を調査票の表紙に記載し、調査票への回答をもって同意したものとみなした。またデータの分析に際しては、個人が特定されないよう統計的に処理した。

表 1 分析対象者の特徴

属性	回答	N(=581)(%)
性別	男性	255 (44.0)
	女性	325 (56.0)
年齢	65-69	185 (32.6)
	70-74	203 (35.7)
	75-79	180 (31.7)
学歴	小学校	2 (0.3)
	中学校	94 (16.3)
	高等学校	291 (50.3)
	短期大学・専門学校	77 (13.3)
	大学	99 (17.1)
	大学院	7 (1.2)
	その他	8 (1.4)
配偶関係	有	11 (1.9)
	無	566 (98.1)
就業	有	160 (27.5)
	無	410 (71.9)
住居の種類	持ち家	394 (68.9)
	賃貸	178 (31.1)
暮らし向き	大変苦しい	36 (6.2)
	やや苦しい	92 (15.9)
	普通	332 (57.4)
	ややゆとりがある	87 (15.0)
	大変ゆとりがある	31 (5.4)
主観的健康感	良い	470 (81.0)
	良くない	110 (19.0)
介護サービス	利用	26 (4.5)
	非利用	550 (95.5)

(%は有効回答に占める割合。なお、変数によって合計度数は異なる。)

### Ⅲ. 結果

#### 1. 高齢者用被援助志向性尺度の再検討

##### (1) 項目分析および探索的因子分析の結果

高齢者用被援助志向性尺度 10 項目について項目分析を行った結果、いずれの項目にも天井効果および床効果は見られなかった。

そこで、この 10 項目について探索的因子分析を行った。その際、抽出する因子数は研究Ⅲと同様に 2 因子に固定した。その結果、2 因子 10 項目（第 1 因子「援助に対する欲求」6 項目、第 2 因子「援助に対する抵抗感」4 項目）が抽出されたため、因子の解釈可能性も考慮してこれを採用した（表 2）。

表 2 高齢者用被援助志向性尺度における探索的因子分析の結果

	1	2	I-T相関
第1因子: 援助に対する欲求 ( $\alpha = .82$ )			
困っていることを解決するために、行政からの助言や援助が欲しい。	.78	-.04	.74***
自分が困っているときには、行政にも相談にのってほしい。	.74	.00	.73***
困っていることを解決するためには、進んで行政の手を借りたい。	.73	-.13	.70***
困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる身近な人が欲しい。	.57	.16	.76***
困っていることを解決するために、身近な人からの助言や援助が欲しい。	.54	.04	.72***
自分が困っているときには、話を聞いてくれる身近な人が欲しい。	.47	.13	.69***
第2因子: 援助に対する抵抗感 ( $\alpha = .68$ )			
公的な機関からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	-.11	.77	.77***
公的な支援に頼ることは、恥ずかしいことだと思う。	.01	.61	.73***
身近な人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	.12	.57	.76***
人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。	.12	.38	.60***
因子間相関	—	.08	
		—	

\*\*\* p<.001

## (2) 信頼性と妥当性の検討

抽出された2因子についてクロンバックの $\alpha$ 係数の算出を行ったところ、「援助に対する欲求」で $\alpha=.82$ 、「援助に対する抵抗感」で $\alpha=.68$ となった。次に因子の持つ各項目についてItem-Total相関を行ったところ、全ての項目において $r=.60$ から $.77$ のいずれも有意な正の相関( $p<.001$ )がみとめられた。

また基準関連妥当性を検討すべく、介護サービスの利用者と非利用者で下位尺度ごとに尺度得点の平均の比較を行ったところ、「援助に対する欲求」( $t(574)=-0.9, n.s.$ )と「援助に対する抵抗感」( $t(574)=0.3, n.s.$ )のいずれにおいても有意な差はみられなかった(表3)。

表3 高齢者用被援助志向性尺度の介護サービス利用者と非利用者間での得点の比較

介護サービス(N)	援助に対する欲求			援助に対する抵抗感		
	平均	標準偏差	t値(df)	平均	標準偏差	t値(df)
利用 (26)	18.7	6.4	-0.9	11.2	4.4	0.3
非利用 (550)	19.6	5.4	(574)	11.0	3.4	(574)

なお、下位尺度ごとの男女別および年齢階級別の下位尺度得点の分布は表4の通りであり、性別と年齢の2要因分散分析の結果、いずれの下位尺度においても性別及び年齢による主効果および交互作用はみられなかった。

表4 下位尺度ごとの男女別および年齢階級別の尺度得点の分布

年齢(N)		援助に対する欲求 (平均得点±標準偏差)	援助に対する抵抗感 (平均得点±標準偏差)
男性	65歳-69歳(83)	19.81±5.41	11.30±3.50
	70歳-74歳(89)	19.17±5.44	11.31±3.57
	75歳-79歳(77)	19.55±5.22	10.95±3.63
	全体(249)	19.49±5.36	11.21±3.58
女性	65歳-69歳(102)	18.71±5.74	10.15±3.52
	70歳-74歳(113)	19.36±5.61	10.55±3.14
	75歳-79歳(103)	20.88±5.11	11.75±3.21
	全体(318)	19.70±5.55	10.79±3.38
男女	全体(567)	19.58±5.46	10.98±3.44

## 2. 被援助志向性の関連要因の検討

重回帰分析の結果は、表 5 の通りであった。まず「援助に対する欲求」について、重相関係数( $R$ )は.265( $p<.01$ )、調整済み決定係数( $R^2$ )は.042 となった。投入した独立変数のうち、学歴 ( $p<.01$ )、近所付き合いの程度( $p<.05$ )、主観的健康感( $p<.01$ )で有意な関連が認められ、年齢では有意な関連の傾向( $p<.10$ )が認められた。すなわち、学歴の低い者、近所付き合いの程度が高い者、主観的健康感について良くないと評価した者、年齢の高い者で尺度得点が高く、援助に対する欲求が高いことが示された。

次に「援助に対する抵抗感」について、重相関係数( $R$ )は.341( $p<.001$ )、調整済み決定係数( $R^2$ )は.089 となった。投入した独立変数のうち、学歴( $p<.001$ )で有意な関連が認められ、年齢および現在の配偶関係では有意な関連の傾向( $p<.10$ )が認められた。すなわち学歴の低い者、無配偶の者、年齢の高い者で尺度得点が高く、援助に対する抵抗感が強いことが示された。

表5 被援助志向性における関連要因の検討：下位尺度ごとの重回帰分析の結果

独立変数	援助に対する欲求(N=506)		援助に対する抵抗感(N=506)	
	標準偏回帰係数(β)	相関係数(r)	標準偏回帰係数(β)	相関係数(r)
性別(→女性)	.053	.016	-.024	.057 <sup>†</sup>
年齢	.087 <sup>†</sup>	.095*	.081 <sup>†</sup>	.095*
学歴(就学年数換算)	-.144**	-.156**	-.195**	-.257**
現在の配偶関係(→無)	-.047	-.019	.085 <sup>†</sup>	.116**
就業の有無(→有)	.050	.000	.010	-.010
暮らし向き(→大変ゆとりがある)	-.066	-.117**	-.062	-.171**
居住形態(→賃貸)	-.042	.025	.038	.145**
近所づきあいの程度(→程度少)	.122*	.062 <sup>†</sup>	.059	.079*
別居家族と会う頻度(→頻度少)	.022	.016	-.006	.052
友人と会う頻度(→頻度少)	-.071	-.006	.066	.156**
グループ活動への参加の有無(→参加していない)	.007	-.002	.077	.139**
自治会などへの参加の有無(→参加していない)	-.059	-.018	-.064	.032
ひとり暮らし年数	-.005	-.001	-.011	.044
日常生活における移動能力(→能力低)	-.017	.034	.042	.109**
主観的健康感(→良くない)	.143**	.156**	.033	.115**
重相関係数	.265**		.341**	
自由度調整済みR <sup>2</sup>	.042		.089	

<sup>†</sup> p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01

#### IV. 考察

本研究の目的は、研究Ⅲにて新たに作成した高齢者用被援助志向性尺度の再検討を行い、尺度としての安定性を検討することであった。

##### 1. 高齢者用被援助志向性尺度の再検討

研究Ⅲと同一の方法による探索的因子分析を行った結果、高齢者用被援助志向性尺度が2因子10項目から構成されることが改めて確認された。その後、尺度の安定性を確認すべく、各下位尺度における信頼性分析、および Item-Total 相関による級内相関係数の検討を行った結果、いずれについても研究Ⅲとほぼ同様な結果を得た。

一方で、介護サービスの利用の有無を基準とする基準関連妥当性の側面からの検討を行った結果、サービス利用者とサービス非利用者でいずれの下位尺度においても得点に有意差はみられなかった。

以上の結果から、高齢者用被援助志向性尺度には尺度としての安定性があると考えられる。一方で、今回の分析結果からは研究Ⅲで示された基準関連妥当性が確認されなかったが、その原因として分析対象者における介護サービスに関する回答の偏りが研究Ⅲに比べてさらに大きかったことによる影響が考えられる。この点については、引き続き検討を続ける必要があるといえよう。

##### 2. 独居高齢者における被援助志向性の関連要因の再検討

下位尺度ごとにその尺度得点を従属変数とする重回帰分析を行ったところ、「援助に対する欲求」については学歴と健康状態で、「援助に対する抵抗感」については学歴でそれぞれ有意な関連が認められた。研究Ⅲでは「援助に対する欲求」と「援助に対する抵抗感」の両者に対して暮らし向きが影響を与えていたのに対し、本研究では「援助に対する欲求」と「援助に対する抵抗感」の両者に対して学歴が影響を与えており、学歴の高さが援助に対する欲求と抵抗感の両方を低減させる要因となっていることが示唆された。



一見、研究Ⅲの結果と本研究の結果は異なる様相を示しているようであるが、学歴は社会経済的地位を示す代表的な変数の一つであり、学歴の高さはその人の経済的な豊かさや人的ネットワークの広さにも反映されている可能性が考えられる。近年の学術調査において、資産や収入の多寡に関する具体的な質問を行うことは個人情報保護やプライバシーの観点から難しいが、本研究の結果から経済的な豊かさが新たな援助に対する欲求を低減させるとともに、人的ネットワークの広がりや他者に援助を求めることへの抵抗感を弱めているものと推察される。

また「援助に対する欲求」においてのみ、主観的健康感においても有意な関連がみられたが、研究Ⅲにおいては「援助に対する欲求」に対して日常生活における移動能力が影響を与えることが明らかになっている。こちらも一見して異なる様相を示しているようであるが、主観的な「自分の健康に対する評価」はその人の日常生活における移動能力を反映して形成されるものと推察でき、援助欲求が身体能力の低下に伴って生じられることを示唆する重要な知見であると考えられる。

以上のように、重回帰分析モデルとしては「援助に対する欲求」、「援助に対する抵抗感」ともに有意であり、いずれのモデルにおいても影響を与える要因として想定したものうち有意な関連を持つものが含まれることが示された。しかし研究Ⅲと同様、両モデルとも決定係数が低いためどの要因も強い影響があるとは言い切れず、投入した独立変数以外の要因が関与している可能性が推察される。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究の結果から、高齢者用被援助志向性尺度が一定の安定性を持つことが示されたと考えられる。一方で今回の分析では基準関連妥当性が示されず、回答に偏りが生じやすい介護サービスの利用の有無以外の基準を設ける必要があると考えられる。また重回帰分析の結果が研究Ⅲにて示されたものと異なっていた理由については分析対象者の持つ特徴の違いや地域差などが考えられ、今後さらに検討を続ける必要があるといえよう。

## 第6章

### 研究V

「他者に援助を求めること」に関する独居高齢者へのインタビュー  
の内容分析

## I. 問題と目的

研究Ⅲにおいて新たに作成した高齢者用被援助志向性尺度の信頼性・妥当性が示され、研究Ⅳではその再確認を行った。これらの結果から、高齢者の被援助志向性について明らかにする際は、「援助に対する欲求の高低」と「援助に対する抵抗感の強弱」の2つの観点からの検討が必要であることが改めて示された。

新たな尺度の妥当性について、研究Ⅲにおいては基準関連妥当性の観点から検討を行い、一定の妥当性が確認された。しかし新たな尺度の作成にあたっては、妥当性に関してより慎重に、かつ詳細な検討を行う必要があるといえよう。その上では、「援助に対する欲求」および「援助に対する抵抗感」それぞれの下位尺度得点に特徴がみられた調査対象者に対する、質的調査を用いたアプローチが有効であると考えられる。

すなわち、援助に対する欲求の高低や援助に対する抵抗感の強弱について、それらを裏付ける「過去または現在における経験の有無やその内容」について聞き取りを行うことにより、独居高齢者の被援助志向性に影響を与える経験について検討が可能であると考えられる。同様に、現在の環境や性格などに起因する「援助を受けることそのものについての考え方」について聞き取りを行うことで、被援助志向性に影響を与える「基本属性や社会変数以外の要因」についても検討が可能であると考えられる。

そこで本研究では、研究Ⅳにおいて調査対象とした独居高齢者のうち、「援助に対する欲求」と「援助に対する抵抗感」のそれぞれに特徴的な尺度得点を示した者を対象としたインタビュー調査を実施することで、それらの要因についてより具体的に検討して整理、体系化するとともに、定性的に高齢者用被援助志向性尺度の妥当性を再検討することを目的とした。

## Ⅱ. 方法

### 1. 調査対象者

調査対象者の選定にあたり、まず研究Ⅳにおける質問紙調査において使用した調査用紙の末尾に設けた「インタビュー調査に対する協力依頼」に応じた独居高齢者のうち、高齢者用被援助志向性尺度における下位尺度である「援助に対する欲求」および「援助に対する抵抗感」の全ての項目に回答し、かついずれの下位尺度についても尺度得点が平均±1SD以上高い、もしくは低い得点であった者 13 名のうち 8 名（男女各 1 名ずつ）をインタビュー対象者候補とした。

その後候補者に対し、郵送によるインタビュー調査に対する協力の可否を確認し、調査依頼に応じた 5 名を分析対象者（A、B、C、D、E）とした。一方、インタビュー対象者候補のうち、【援助に対する欲求が低く、抵抗感が強い女性】と【援助に対する欲求が強く、抵抗感が強い男性】、【援助に対する欲求が強く、抵抗感が強い男性】からは返答を得られなかったため、インタビュー対象者候補 3 名を追加して同様に郵送によるインタビュー調査に対する協力を依頼した。

その結果、このうちの 1 名が調査依頼に応じたため、分析対象者（F）として追加した。その他 2 名のうち 1 名は調査協力を辞退し、1 名からは返答を得られなかったため、最終的に 6 名（男性 4 名、女性 2 名）を分析対象者とした（図 1、表 1）。

図1 インタビュー対象者の選定基準と方法

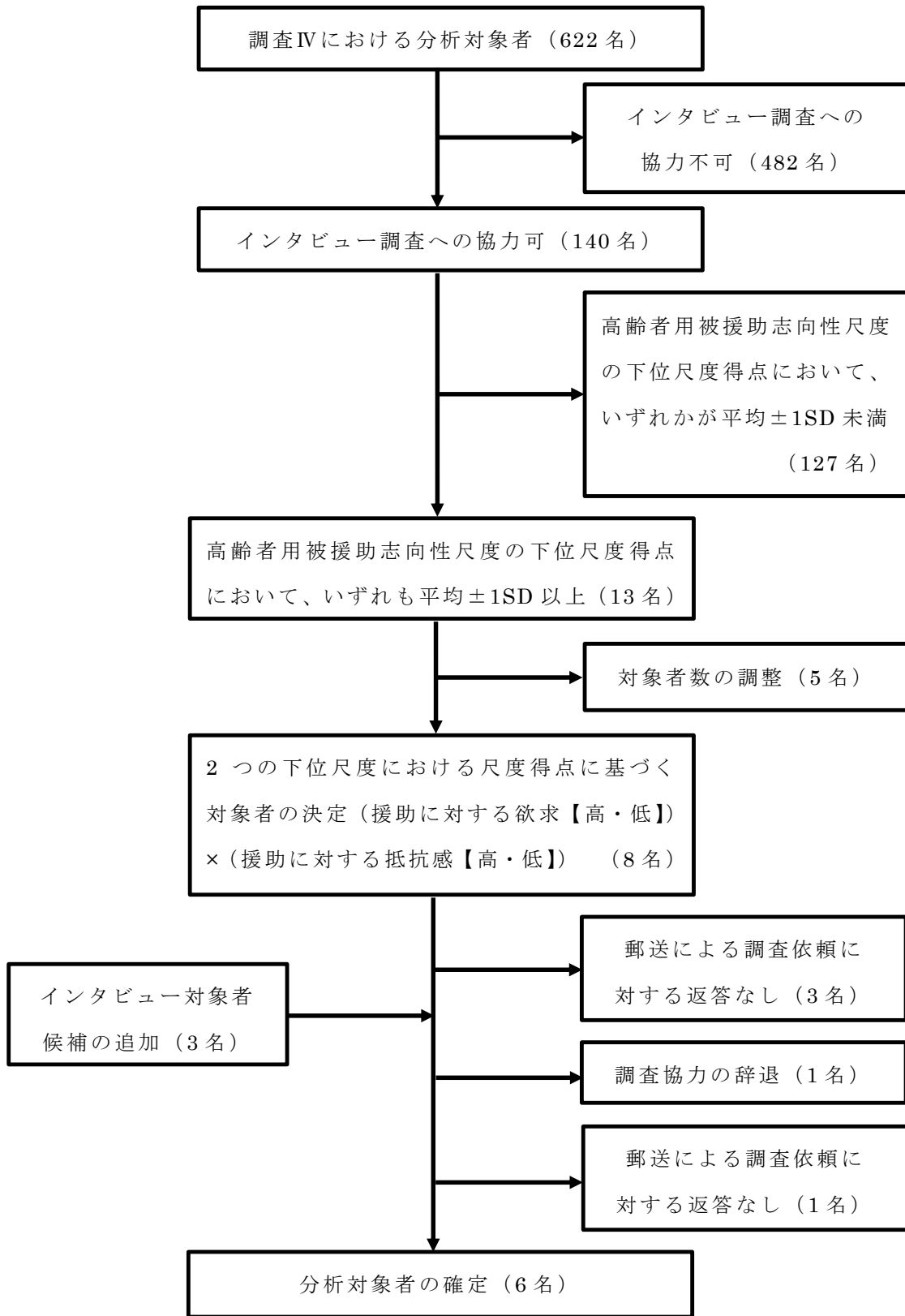


図1 インタビュー対象者の選定基準と方法

## 2. 調査方法

インタビューは個別面接とし、調査に先んじて作成したインタビューガイドを用いた半構造化面接の手法を用いて行った。なお、インタビューを行うに当たっては、事前に回答した質問紙調査の結果を用意し、必要に応じてこれらも参照しながら質問を行った。

インタビューの内容は IC レコーダーを用いて全て録音し、逐語録データを作成した。なお録音時間は、平均で 54.2 分であった。

## 3. 調査項目

調査項目は研究目的に沿う形で検討し、①周囲の状況などについて（別居家族の有無、友人との付き合い方など）、②印象に残っている、援助を受けた経験、③他者から援助を受けるということについての 3 点としたが、内容を限定することなく自由に語ってもらうこととした。なおこれらの調査項目は、老年学を専攻する研究者との検討を行い設定した。

## 4. 分析方法

インタビューの分析は、大谷(2008,2011)による SCAT(Steps for Coding and Theorization)による定性的手法を採用した。SCAT は逐語化した音声データに対して明確な 4 つのステップによるコーディングを行うことにより、構成概念の抽出とそれに続くストーリーラインの生成を試みる分析手法である。

SCAT は手続きを明確に示すことで分析過程の省察可能性と反証可能性（大谷, 2008）を担保している点において科学的な分析手法であることや、常に文脈を意識して振り返りを繰り返しながらコーディングするという直感的に理解しやすい手法であることに鑑み、これを採用することとした。SCAT は 4 つのステップによるコーディングを基本としているが、本研究でもこの手法に則り、図 2 の手順によるコーディング作業を行った。

その後、得られた結果について質問紙調査における高齢者用被援助志向性尺度の尺度得点の結果との整合性を個別に検討することで、新たに作成した尺度の妥当性を検討すると

ともに、分析対象者 6 名全員の SCAT による分析結果を相互に比較した。

## 5. 調査に係る倫理的配慮

調査協力を依頼するにあたっては、事前に研究への参加依頼書を送付した上で、郵送による承諾書を返送した者にのみ改めて依頼を行った。依頼文書には調査の主旨の説明や個人情報およびプライバシーの保護に関する説明、研究協力が自由意思に基づく旨を記載し、その返送をもって同意したものとみなした。

またインタビューを実施するにあたっては、内容をすべて録音し、逐語録を作成することについて同意を得たうえで行うこととした。さらに、インタビュー中における中断や中止はいつでも可能であることを伝えるとともに、データは適切に管理することを説明した。

データの分析に際しては、個人が特定されることのないよう個人名や団体名は伏せる形で記載を行った。

表 1 分析対象者の特徴

調査協力者	性別	年齢	録音時間 (分)	同居者	最終学歴	暮らし向き (5件法)	健康状態 (4件法)	援助に対する欲求 (尺度得点高・低群)	援助に対する抵抗感 (尺度得点高・低群)
A	男	73	60	無し	大学	どちらともいえない	まあ良い	低	低
B	女	68	49	無し	高校	とても余裕がある	良い	低	低
C	男	72	53	無し	高校	どちらともいえない	良い	低	高
D	男	74	73	無し	大学	どちらともいえない	まあ良い	高	低
E	女	65	44	無し	大学	やや苦しい	良い	高	低
F	男	74	46	無し	高校	どちらともいえない	まあ良い	高	高

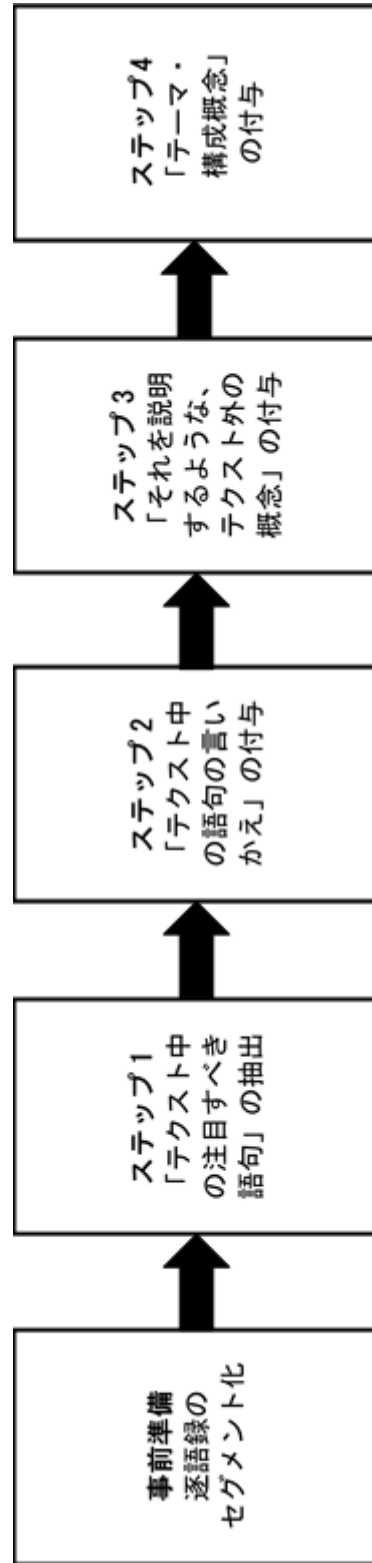


図 2 SCAT による 4 ステップコーピングの手順



### Ⅲ. 結果

#### 1. 分析対象者それぞれにおけるストーリーラインの概要と理論記述

SCATによる内容分析の結果、6名のストーリーラインと理論記述は、それぞれ以下の通りとなった。なお、本項においてストーリーラインは概要のみを記述することとする。なお各段落末尾に示す数字は、ストーリーライン全文における発言番号である。

(各対象者のストーリーライン全文は、付録「SCATによる内容分析の結果」にて示す)

##### 1-1. 分析対象者 A

###### (1) ストーリーラインの概要

Aは73歳の男性であり、高齢者支援の仕事（ガイドヘルパー）に就いている。仕事柄、援助を受けることに対して抵抗はないものの、極力その立場にはならず、元気に長生きして病まずに死ぬことを理想としている。(2,13)

幼少期から自助努力の求められる家庭環境にあったことや他人に頼ることを避けて、物事を独力で解決してきたこともあり、被援助経験に乏しい。終始、人間関係に起因する援助関係に対する欲求の低さや人間関係に価値を見出すことに対する困難、あるいは対人関係への期待の無さを述べているが、その背景には生来の人を信用しない姿勢と自助を理想とする考え方がその背景にあるものと推察される。(17,19,51,53,61,62,69)

###### (2) 理論記述

- ①職業経験が被援助志向性に影響を及ぼす。
- ②幼少期の家族環境が、その後の被援助志向性に影響を及ぼす。
- ③情緒的な援助関係の構築や友人などへの援助要請においては、人に対する基本的な信頼関係の有無やその程度が関連している。
- ④生来の性格と生育環境、現在までの経験の両方が、被援助志向性に影響を及ぼす。

## 1-2. 分析対象者 B

### (1) ストーリーラインの概要

B は 68 歳の女性であり、今日まで飲食業を続けてきたが、今年での廃業を決めている。3 年前に、一緒に働き、晩年は介護をしていたパートナーと死別したが、友人や親族とは良い関係を築いており、同時に互助的な関係となっている。(2,7,16,28)

援助欲求は低く、施設利用も選択肢に入れている。その背景として、普段交流のない親族には頼れない、迷惑をかけたくないということを挙げている。自己決定を重視してきたこともあり、被援助経験に乏しく援助に対する欲求そのものは低いが、パートナーを介護した経験や介護サービスの実情を近くで見てきた経験から、援助に対する抵抗感はさほどない様子である。(32,45,56,58,67)

### (2) 理論記述

- ①身近な人の介護経験が、自身の援助に対する抵抗感を低減させる。
- ②迷惑を掛けたくないという考えが援助に対する欲求を低める。
- ③被援助経験の乏しさは、援助に対する欲求そのものを低める。
- ④周囲との互助関係が、援助に対する抵抗感を低減させる。

## 1-3. 分析対象者 C

### (1) ストーリーラインの概要

C は 72 歳の男性であり、収入や人との関わりを維持するために就労を継続している。現状では援助の必要性を感じておらず、援助に対する欲求は低い状態にある。また援助拒否の傾向にあるととれる発言が多く、援助に対する抵抗感も高い。(6,10,25,30)

社会全体の他者依存傾向に対する否定的な感情を抱いている。また、自主自立の精神を重視する価値観のために被援助経験に乏しい。(32,35)

自身の援助に対する考え方は性格に起因するものと捉えている様子であるが、宝石店経営という「他者からの援助を期待しづらい環境での生活」の中で物事を独力で解決してき

たことや、盗難被害への懸念から常に警戒心を抱いていたことも現在の被援助志向性に影響を与えている可能性がある」と推察される。(67,73,75)

## (2) 理論記述

①職業経験が被援助志向性に影響を及ぼす影響について、当事者が自覚していないこともある。

②周囲の被援助者の援助者に対する態度や社会全体における他者依存の傾向が、個人の被援助志向性に影響を及ぼし得る。

③被援助経験の乏しさが、援助に対する抵抗感を生起させる。

④援助を受けることに対する態度のあり方を自分の性格に帰属させる傾向にある人がいる。

## 1-4. 分析対象者 D

### (1) ストーリーラインの概要

D は 74 歳の男性であり、民生委員としての活動や自治会における仕事に携わっている。区との協働による自治会活性化の取り組みにも関わるなど、周囲に広い交友関係を持ち、周囲からの援助要請にも進んで応諾している。(2,12,17,25,55)

長男夫婦との密な交流があり、有事に際しては、すぐ近くに住む長男夫婦を頼りにしたいと考えている。最後は人に援助を求めることになると考えており、援助に対する抵抗感は低い。当人は普段からの民生委員としての取り組みが、援助を受けることへの抵抗感を低めていると自認している。(29,33,35,41,48,50,58,60)

### (2) 理論記述

①交友関係の広さや近所付き合いの充実が、援助に対する抵抗感を低減する。

②援助者としての経験が、援助を受けることへの抵抗感を低減する。

③日頃から密に交流している親類縁者を援助要請対象として想定する。

④援助者としての役割を持っていると、援助に対する抵抗感が低減する。

## 1-5. 分析対象者 E

### (1) ストーリーラインの概要

E は 65 歳の女性であり、昨年定年退職となった後、求職活動を行っている。人は互いに支え合うことができるという信条があり、友人や行政からの援助に対する抵抗感はない。ただし、自身の経験から「事情を考慮して援助を求めるべきである」とも考えており、友人などに相談が難しいことはまず身内に、さらに困難な内容は行政に相談するというスタンスを持っている。(2,29,30,59)

援助を求めることによる羞恥や汚辱の心配はしておらず、世間体などを気にした言動をとる必要も感じてはいない。行政による求職支援サービスを利用中であり、求職支援に対する欲求が高まっている。困難を抱えた際は、他者に援助を求めて良いというのが基本的な姿勢である。(43,50,52,61,63)

### (2) 理論記述

- ①相互による助け合いの意識が、援助に対する抵抗感を低減する。
- ②世間体への懸念や援助を求めることそのものへの羞恥心などが、援助に対する抵抗感を強める。
- ③必要性に迫られることで、援助欲求は高まる。
- ④相談内容の程度によって、人は援助要請対象を取捨選択する。

## 1-6. 分析対象者 F

### (1) ストーリーラインの概要

F は 74 歳の男性であり、足に障害を抱えているほか、腎臓透析を受けている。親類縁者が亡くなって以降は、週 3 回訪れるヘルパーに買い物・掃除・洗濯・片付けといった家事全般を任せている。(8, 21,33,50,84)

生活保護と年金を受給中であり、家賃も区が負担するなど、専門職や行政機関からの援助を受けながら生活している状況にある。援助を受けて生活は安定しており、今後もこの

生活を続けていきたいと考えている。(37,39,43)

普段から生活圏に侵入されることに起因する援助に対する抵抗感を感じており、一方で援助を受けなくては生活が成り立たないという現実に対する葛藤がある。ヘルパーなどにあまり直接お礼を言うようなやりとりをしないものの、これまで多くの人から助けられながら生活してきたという認識を持っている。(41,71,79,86)

## (2) 理論記述

①援助内容に対する満足感や援助による生活の安定を経験することが、援助に対する欲求を高める。

②援助に対する抵抗感を持ちながらも、やむを得ず援助サービスを利用している場合には、その現状に対して葛藤を抱えている可能性がある。

③援助に対する肯定的な反応に乏しい高齢者が、必ずしも援助を受けることに否定的であるとはいえない。

## IV. 考察

### 1. 被援助志向性の4タイプ別にみる、「援助に対する考え方」

#### (1) 援助に対する欲求「低群」・援助に対する抵抗感「低群」

高齢者用被援助志向性尺度の得点において援助に対する欲求と抵抗感のいずれも弱かった分析対象者 A と分析対象者 B (以下 A、B) のストーリーラインに着目すると、両者に共通する点として被援助経験に乏しく、自己決定や自助努力が求められる機会の多い中で生活してきたという背景が挙げられる。このことは、援助に対する欲求が生活環境による影響を受けることを示唆する結果であると考えられる。また A、B とも現在も就労を継続しており、そのために生活は比較的安定していることがインタビュー中の発言や質問紙調査への回答から推察される。そのために公的機関からの援助などを現状では特に必要としないことも、公的な援助に対する欲求を低める要因となっている可能性が考えられる。

ただし A、B とも今後公的な援助に頼らざるを得ない状況になった際は、公的なサービスを利用するつもりがあるという趣旨の発言があり、公的な援助を受けることに対しては柔軟な考え方を持っている様子がうかがえる。A は日頃の職務経験上、援助サービスを利用しながら生活している高齢者を見ていることから、また B はパートナーを介護した経験や介護サービスの実情を近くで見てきた経験から、いずれも援助を受けることに抵抗はないと述べている。このことから、公的な援助に対する抵抗感もまた生活環境によって低減されるものと考えられる。

一方、友人などの親しい相手からの援助については A と B で考え方がかなり異なっていた。A は「他人に頼ることを避けてきた」と述べているが、その背景には「人間関係に価値を見出すことに対する困難、あるいは対人関係への期待の無さ」が一貫して語られており、それ故に親しい相手からの援助にそもそも期待しておらず、それ故に欲求も低い状態にあることがうかがえる。

それに対して B は、長年に渡り付き添ったパートナーと死別した後も、近隣に住む友人や親族と良好な関係を築いている。しかし、「普段交流のない親族には頼れない」、あるいは単に「迷惑をかけたくない」ということを理由に挙げており、親しい相手が周囲にいるにもかかわらず、そうした相手を対象として援助の欲求が高まることはないという趣旨の発言がみられた。

親しい相手からの援助について A と B の発言に共通してみられる特徴としては、相手から援助をしてもらうことそのものに抵抗があるということではなく、むしろ援助そのものに期待していない、あるいは相手に申し訳ないという気持ちが先に立つといったように、援助要請を行う相手に対する懸念を挙げている点である。このことが前述の「援助経験の乏しさ」に起因するものなのか、あるいは別の要因が存在するのかという点については、さらに検討が必要であろう。

以上より、A と B は援助に対する欲求と抵抗感のいずれも低い状態にあることが推察され、事前に回答した尺度における下位尺度得点とほぼ一致するものであったと考えられる。

### (2) 援助に対する欲求「低群」・援助に対する抵抗感「高群」

高齢者用被援助志向性尺度の得点において援助に対する欲求が低く、援助に対する抵抗感が強かった分析対象者 C（以下 C）のストーリーラインに着目すると、A や B と同様に被援助経験に乏しく現在も就労を継続しており、現状では公的な援助の必要性を感じていない様子が見える。また、現在の居住地に移り住んで間もないために友人などのネットワークに乏しいが、これまで住んでいた場所での人間関係のしがらみに苦慮していた旨の発言から、現状パーソナル・ネットワークを拡大しようという意志も小さく、身近な相手からの援助に対する欲求も小さい状態にあるものと推察される。

一方で援助に対する抵抗感は強く、「人の世話になりたくない」といった発言からは援助拒否の傾向が感じられる。被災時の炊き出しに対する批判の声を耳にした経験などから社会全体の他者依存傾向に対する否定的な感情を抱いているほか、他者を頼りにしづらい環境で生活を続けていた影響が考えられるが、C 本人はあくまでも性格によるものと述べている。本人に自覚がないうちに、環境による影響を受けている可能性が推察される。

以上より、C は援助に対する欲求が低く、抵抗感の強い状態にあることが推察され、事前に回答した尺度における下位尺度得点とほぼ一致するものであったと考えられる。

### (3) 援助に対する欲求「高群」・援助に対する抵抗感「低群」

高齢者用被援助志向性尺度の得点において援助に対する欲求が高く、援助に対する抵抗感が弱かった分析対象者 D と分析対象者 E（以下 D、E）のストーリーラインに着目すると、両者に共通する点として、日頃からサービスの利用や協働といった形で公的機関との関係を持っているという点が挙げられる。また D、E とも今後も関係を継続していく意向があり、そうした援助に対するニーズも高い状態にあるものと考えられる。また、交友関係が広く、友人同士の互助的な関係を重視している点や、頼りにできる親類縁者が近くに住んでいるという点も D、E に共通しており、有事にはそうした相手に援助を求めたいという考えを持っていると推察される。

一方援助に対する抵抗感について、Dは「所属する自治会における民生委員としての取り組みや、そこでの互助的な関係性の構築」が援助を受けることへの抵抗感を低めていると述べているのに対して、Eは世間体への懸念や援助を求めることそのものへの羞恥心などがないと述べている。この両者の発言内容は、いずれも「困難を抱えた際は、他者に援助を求めて良い」という考え方が背景にある点が共通しているものと推察できよう。

以上より、D、Eは援助に対する欲求が高く、抵抗感の弱い状態にあることが推察され、事前に回答した尺度における下位尺度得点とほぼ一致するものであったと考えられる。

#### (4) 援助に対する欲求「高群」・援助に対する抵抗感「高群」

高齢者用被援助志向性尺度の得点において援助に対する欲求と抵抗感がいずれも強かった分析対象者F（以下F）のストーリーラインに着目すると、足の障害や腎臓透析などのために生活の多くをヘルパーに依存する状態にあり、生活保護と年金を受給、家賃も区が負担するなどの状況にある。現在の生活の安定は専門職や行政機関からの援助無しには考えられず、Fはこの生活を続けていきたいと述べるなど、公的機関からの援助に対する欲求は高い。また、家族との死別後には孤独感が強まり、地区の民生委員児童委員協議会（民児協）が提供する昼食会に、参加者との会話の機会を求めて参加するなど、身近な人からの援助に対する欲求も高まっていることがうかがえる。

一方で、公的サービス利用を開始した当初から、生活圏に侵入されることに起因する援助に対する抵抗感を感じている趣旨の発言がみられる。しかし、自身の身体的な障害や経済的状況などから援助を受けなくては生活が成り立たないという現実があり、援助に対する欲求と抵抗感の間で葛藤を抱えている状態にあるとも推察される。

以上より、Fは援助に対する欲求が高く、抵抗感の弱い状態にあることが推察され、事前に回答した尺度における下位尺度得点とほぼ一致するものであったと考えられる。



## 2. 理論記述からの総合的考察

対象者 6 名のインタビュー結果から理論記述を行った結果、いずれの対象者においても、現在に至るまでの生活環境が、援助に対する欲求および抵抗感に大きく影響を及ぼすことが示唆された。具体的には職業経験（A、C、E）や互助的な友人関係（B、D、E）、公的サービスの利用（B、E、F）などが挙げられており、現在における被援助志向性が個々人の経験に裏打ちされたものであることが推察できよう。

また A、B、C による発言から、被援助経験に乏しいことが援助に対する欲求を低減させることも示唆された。いずれの対象者においても、自主自立の精神が背景にある旨の発言がみられており、他者に頼らない独力での問題解決を行ってきた結果であると考えられる。

さらに、F のように援助に対する欲求と援助に対する抵抗感のいずれも高い場合には、他の 3 タイプと違い個人内で欲求と抵抗感の間に認知的不協和が生じている可能性があり、それによる葛藤を抱えている可能性があることも示された。

## 2. 高齢者用被援助志向性尺度の下位尺度得点との関連

SCAT による分析結果から、分析対象者 6 名における高齢者用被援助志向性尺度の下位尺度得点の高低と、実際の援助に対する考え方はほぼ一致しているものと推察される。研究 III および IV を通じて尺度の信頼性および妥当性について定量的分析を通じて明らかにしたが、本研究により尺度の妥当性が定性的にも示されたものと考えられる。

## 3. 本研究の限界と課題

研究計画では被援助志向性における 4 タイプについて男女各 1 名、計 8 名に対するインタビュー調査を想定したが、調査対象候補者の調査協力辞退や調査期間上の制約により、2 つのタイプ（欲求×抵抗感：高×高および低×高）について、女性からのインタビューを得ることが出来なかった。それぞれのタイプにあたる対象者に対して追加でのインタビュー調査を行い、より分析を精緻にすることが必要であろう。

## 付録

### SCAT による内容分析の結果

p 80 - 85	分析対象者 A
p 86 - 90	分析対象者 B
p 91 - 95	分析対象者 C
p 96 - 100	分析対象者 D
p101 - 105	分析対象者 E
p106 - 110	分析対象者 F

## 第 7 章

### 結論

## I. 本研究の成果と意義

本研究では独居状態にある高齢者に焦点を当て、その被援助志向性について検討することを目的とした5つの研究を行った。研究の結果として、以下の成果を得た。

### (1) 高齢者における被援助志向性を測定する尺度の作成

先行研究からは該当する尺度が確認できなかったため、研究Ⅰから研究Ⅲを通じて、高齢者における被援助志向性を測定する尺度を作成した。まず研究Ⅰでは、先行研究のレビューの結果から高齢者への適用可能性があると判断した被援助志向性尺度（田村・石隈,2001）を含む質問紙調査を実施した。その結果、被援助志向性尺度を高齢者の被援助志向性を測定する尺度として利用することについて一定の信頼性および妥当性が確認された。しかし、項目分析や因子分析の結果から質問項目の再検討が必要であるほか、今後他の調査に組み込んで活用することを見据えるならば、上述の項目の整理と併せて短縮版の作成も考慮に入れるべきであることが示唆された。

次に研究Ⅱでは、被援助志向性尺度における質問項目の再検討と整理を行い、新たに2因子6項目からなる短縮版被援助志向性尺度を作成した。またこの尺度について、質問項目の内容をもとに下位尺度名をそれぞれ「援助に対する欲求」および「援助に対する抵抗感」と変更した。短縮版被援助志向性尺度の信頼性および原版との等質性を検討した結果、いずれも十分な信頼性および等質性を示す値を得た。一方で、被援助志向性尺度の原版および短縮版では援助要請対象として「公的機関などによる援助」を想定した項目が含まれておらず、高齢者の日常生活における被援助志向性を測定することに特化した尺度とするには、新たな質問項目を加えるなどの処理を加えた新たな尺度の作成が必要であると判断した。

そこで研究Ⅲでは、研究Ⅰおよび研究Ⅱの結果を踏まえ、被援助志向性尺度およびその短縮版を基にした高齢者用被援助志向性尺度を作成した。高齢者用被援助志向性尺度は短縮版被援助志向性尺度に「公的機関などによる援助」を想定した項目を追加したものであ

り、因子分析の結果、最終的に 2 因子 10 項目からなる尺度が作成された。新たな尺度の信頼性および妥当性を検討した結果、いずれについても十分な値を示した。さらに研究Ⅳでは、研究Ⅲとは異なるサンプルを用いた高齢者用被援助志向性尺度の再検討を行った。因子分析による尺度構成の確認や各下位尺度における信頼性分析などの結果、研究Ⅲとほぼ同様の結果が得られたことで、尺度としての安定性が確認された。

以上の結果から、十分な信頼性および妥当性をもつ「高齢者の被援助志向性を測定する尺度」が作成されたといえる。この尺度には、従来の被援助志向性尺度では測定できなかった行政などからの援助を受けることに対する志向性に関する質問項目が含まれており、より幅広く個人の被援助志向性を検討可能である点に有用性がある。また援助が必要と思われる高齢者に対して援助者が援助関係の構築を試みる際、2 つの下位尺度の得点から対象者を 4 タイプ（援助に対する欲求の高低×援助に対する抵抗感の強弱）に分類することで、具体的な方略を模索する際の手がかりを得られる点でも実用的な尺度であると考えられる。

## (2) 独居高齢者における被援助志向性の関連要因の検討

研究Ⅲおよび研究Ⅳでは、高齢者用被援助志向性尺度の各下位尺度得点を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「援助に対する欲求」と「援助に対する抵抗感」の両者に影響を与える要因として、研究Ⅲでは暮らし向き、研究Ⅳでは学歴が認められ、暮らし向きが良いほど、また学歴が高いほど援助に対する欲求と抵抗感の両者を低減させる結果となっていた。

これらの結果から、学歴の高さがその人の経済的な豊かさや人的ネットワークの広さにも反映されている可能性が考えられる。また、暮らし向きが人的ネットワークの広がりにも影響を与えることは岡本(2014)の報告でも明らかにされていることも踏まえれば、経済的な豊かさが新たな援助に対する欲求を低減させるとともに、それに伴う人的ネットワークの広がりが他者に援助を求めることへの抵抗感を弱めているものと推察される。

また研究Ⅲにおいては「援助に対する欲求」に対して日常生活における移動能力が、研究Ⅳにおいては主観的健康感が影響を与えることが示唆され、日常生活における移動能力が低いほど、また主観的健康感が悪いほど援助に対する欲求を高める結果となっていた。主観的な「自分の健康に対する評価」はその人の日常生活における移動能力をある程度反映して形成されるものと推察できることを考慮すれば、これらの結果は援助欲求が身体能力の低下に伴って生起されることを示唆する重要な知見であると考えられる。

### (3) 独居高齢者へのインタビューを通じた高齢者用被援助志向性尺度の妥当性と関連要因の検討

高齢者用被援助志向性尺度における下位尺度の尺度得点に特徴がみられた独居高齢者 6 名に対するインタビュー調査の内容分析を SCAT により行った結果、分析対象者 6 名における高齢者用被援助志向性尺度の下位尺度得点の高低と、実際の援助に対する考え方がほぼ一致していることが示唆された。研究ⅢおよびⅣを通じて尺度の信頼性および妥当性について定量的分析を通じて明らかにしたが、本研究により尺度の妥当性が定性的にも示されたものと考えられる。

また、いずれの対象者においても現在に至るまでの生活環境、すなわち職業経験や互助的な友人関係、公的サービスの利用の経験などが現在における被援助志向性に影響を与えていることが示唆されたほか、被援助経験に乏しいことが援助に対する欲求を低減させることや、援助に対する欲求と援助に対する抵抗感のいずれも高い場合に欲求と抵抗感の間に認知的不協和を生じる可能性などが示された。

5つの研究を通じて、援助拒否や社会的孤立およびその延長上に生じうる孤立死や消費被害などの問題に正対する上で検討が必要とされながら、今日まで十分な検討がなされてこなかった高齢者の被援助志向性を測定する尺度が作成されるとともに、独居高齢者における被援助志向性の関連要因についても検討が行われた。このことは、今後さらに増加する

ことが見込まれる独居高齢者に対する身近な人物、あるいは公的機関などによる援助の在り方を検討する上で大きな意義を持つと考えられる。

## Ⅱ. 今後の展望と課題

本研究により高齢者の被援助志向性を測定する尺度が作成されたことで、今後はこの尺度を用いた社会調査や相談援助における活用などが期待される。10項目からなる高齢者用被援助志向性尺度は、社会調査における調査項目として組み込むことが比較的容易であるほか、「他者から援助を受けること」に対する考え方を問うチェックリストとしての活用も可能である。すでに述べた通り高齢者に回答を求めることで個人を大きく4タイプに分類可能であることから、高齢者の相談援助などにおけるインテーク時に、今後の具体的な援助方略を模索するための資料の一つとしての活用が考えられる。一例として、尺度得点の様子から援助に対する欲求が高く抵抗感が弱い高齢者であると判断された場合は、多くの選択肢を提示し、その中から主体的に必要なサービスを取捨選択させる方法が考えられる。一方で、援助に対する欲求が低く抵抗感が強い高齢者であれば、何らかの形で「援助を受けても良い」という関係性を構築できるよう、多職種連携も視野に入れながら援助方略を考えるなどの方法が考えられる。すなわち、画一的な援助ではなく相手の特性に着目した柔軟な援助を目指す上で本尺度が有効に活用できる可能性があり、この点については引き続き検討を続けていきたい。

一方今後の課題として、以下の事柄が挙げられる。まず本研究では非独居高齢者に比して独居高齢者が抱える社会的孤立や消費被害などのリスクの大きさや、有事に際して自発的な援助要請が必要不可欠となるという特徴などを考慮し、一貫して都市部に居住する独居高齢者のみをサンプリングしたが、高齢者の生活環境は多様化しており、後は夫婦で生活する高齢者をはじめとする他の居住形態にある高齢者や地方部在住の高齢者などにも調査対象を拡大して、尺度の信頼性および妥当性を再確認する必要があると考えられる。

また、研究ⅢおよびⅣにおける重回帰分析の結果、決定係数の状況からそれぞれにおいて有意であった変数以外の影響が考えられるため、インタビュー調査を通じて関連が示唆された具体的な職業経験や互助的な友人関係の多寡、身近な人物の公的サービスの利用経験などに関する変数を今後の調査で新たに投入するなどの検討を続ける必要がある。

さらにインタビュー調査では、本来事前に想定した条件に沿って 8 名に対してインタビューを行うところ、調査対象候補者の調査協力辞退や調査期間上の制約により 6 名を対象とするインタビューにとどまった。結果として 6 名を対象としたインタビューの内容分析から、研究目的は達成されたものと判断したが、さらに追加のインタビュー調査を行い、妥当性を再確認する必要がある。



## 引用文献

- 相川 充 (1987a). 被援助者の行動と援助 中村陽吉・高木 修 (編) 「他者を助ける行動」の心理学 光生館 pp.136-145.
- 相川 充 (1987b). 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, **58**, 366-372.
- Deane, F. P., Wilson, C. J., & Ciarrochi, J. (2001). Suicidal ideation and help-negation: Not just hopelessness or prior help. *Journal of Clinical Psychology*, **57**, 901-914.
- DePaulo, B. M. (1983). Perspectives on help-seeking. DePaulo, B. M., Nadler, A., & Fisher, J. D. (Eds.) *New Directions in Helping*. Vol.2 Academic Press. pp.3-12.
- Fischer, E. H. & Turner, J. L. (1970). Orientations to seeking professional help: Development and research utility of an attitude scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **35**(1), 79-90.
- 原田謙 (2012). 社会階層とパーソナルネットワーク —学歴・職業・所得による格差と性差— 医療と社会, **22**, 57-68.
- 本田真大・三鈷泰代・八越 忍・西澤千枝美・新井邦二郎・濱口佳和 (2009). 幼児をもつ母親の子育ての悩みに関する被援助志向性の探索的検討 —身近な他者と専門機関に相談しにくい理由の分析— 筑波大学心理学研究, **38**, 89-96.

本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 (2011). 中学生の友人、教師、家族に対する被援助志向性尺度の作成 カウンセリング研究, **44**, 254-263.

Husaini, B. A., Moore, S. T. & Cain, V. A. (2008). Psychiatric symptoms and help-seeking behavior among the elderly: An analysis of racial and gender differences. *Journal of Gerontological Social Work*, **21**, 177-196.

岩田美奈子・大川一郎 (2015). 高齢者の詐欺被害における相談行動抑制の心理的要因 日本心理学会大会発表論文集, **79**, 105.

木村真人 (2014). わが国の学生相談領域における援助要請研究の動向と課題 —2006年から2012年を対象として— 国際研究論叢, **27(3)**, 123-142.

木村真人・水野治久 (2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について —学生相談・友達・家族に焦点をあてて— カウンセリング研究, **37**, 260-269.

越谷めぐみ (2012). 子育て場面における専門機関への援助要請に及ぼす影響について 東北福祉大学大学院総合福祉学研究科紀要, **10**, 79-93.

楠木美貴子 (2007). 一人暮らし高齢者の「援助拒否」と援助ジレンマの研究 —生活実態の肯定的再認識の必要性— 社会福祉士, **14**, 124-132.

Leaf, P. J., Bruce, M. L., Tischler, G. L., & Holzer, C. E., III. (1987). The relationship between demographic factors and attitudes toward mental health services. *Journal of Community Psychology*, **15(2)**, 275-284.

松井 豊 (2010). 心理学論文の書き方---卒業論文や修士論文を書くために (改訂新版)  
河出書房新社

水野治久 (2003). 留学生の被援助志向性に関する心理学的研究 風間書房

水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向 教育心理学  
研究, **47**, 530-539.

水野治久・石隈利紀 (2001). アジア系留学生の専門的ヘルパー、役割的ヘルパー、ボラ  
ンティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連 教育心理学研究,  
**49**, 137-145.

水野治久・石隈利紀・田村修一 (2006). 中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向  
性に関する研究 ―学校心理学の視点から― カウンセリング研究, **39**, 17-27.

水野治久・山口豊一・石隈利紀 (2009). 中学生のスクールカウンセラーに対する被援助  
志向性 ―接触仮説に焦点をあてて― カウンセリング研究, **37**(3), 260-269.

内閣府 (2016). 平成 28 年版高齢社会白書 日経印刷

日本社会福祉学会事典編集委員会 (編) (2014). 社会福祉学事典 丸善出版

Offer, D., Howard, K. I., Schonert, K. A. & Ostrov, E. (1991). To whom do adolescents  
turn for help? Differences between disturbed and nondisturbed adolescents.

Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry, **30**(4), 623-30.

小川栄二・三浦ふたば・中島裕彦 (2009). 利用者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題から福祉労働のあり方を考える 総合社会福祉研究, **34**, 28-40.

大谷 尚 (2007). 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学, **54**(2), 27-44.

大谷 尚 (2011). SCAT : Steps for coding and Theorization —明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法— 感性工学, **10**, 155-160.

Phillips, D. L. (1963). Rejection: A possible consequence of seeking help for mental disorders. *American Sociological Review*, **28**(6), 963-972.

労働政策研究・研修機構 (2014). ユースフル労働統計 —労働統計加工指標集— 労働政策研究・研修機構

斉藤雅茂・冷水 豊・山口麻衣・武居幸子 (2009). 大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴 社会福祉学, **50**, 110-122.

Stoller, E.P. & Cutler, S. J. (1993). Predictors of use of paid help among older people living in the community. *The Gerontologist*, **33**(1), 31-40.

鈴木浩子・山中克夫・藤田佳男・平野康之・飯島 (2012). 介護サービスの導入を困難にする問題とその関係性の検討 日本公衆衛生雑誌, **59**, 139-150.

高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29**, 1-2.

高木 修・妹尾香織 (2006). 援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性 ―行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究 関西大学社会学部紀要, **38(1)**,25-38.

高橋知也・小池高史・安藤孝敏 (2015). 高齢者は誰に援助を求めるか― 高齢者における被援助志向性と援助要請を行う対象との関連の検討から 技術マネジメント研究, **14**, 23-31.

高野 明・宇留田 麗 (2002). 援助要請行動から見たサービスとしての学生相談 教育心理学研究, **50**, 113-125.

高野 明・吉武清實・池田忠義・佐藤静香・関谷佳代 (2008). 学生相談に対する援助要請の態度と学生相談に関して求められる情報の関係 学生相談研究, **28**, 191-201.

田村修一・石隈利紀 (2001). 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究 教育心理学研究, **49**, 438-448.

田村修一・石隈利紀 (2002). 中学校教師の被援助志向性と自尊感情の関連 教育心理学研究 **50**, 291-300。

田村修一・石隈利紀 (2006). 中学校教師の被援助志向性に関する研究 ―状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 教育心理学研究, **54**, 75-89.

Tijhuis, M. A. R, Peters, L. & Foets, M. (1990). An orientation toward help-seeking for emotional problems. *Social Science & Medicine*, **31**, 989-995

與久田 巖・太田 仁・高木 修 (2011). 女子大学生の援助要請行動の領域、対象、頻度と大学生活不安および社会的スキルとの関連 関西大学社会学部紀要, **42(2)**, 105-116.

Waxman, H. M., Carrier, E. A. & Klein, M. (1984). Underutilization of mental health professionals by community elderly, *The Gerontologist* **24(1)**, 23-30.

## 謝辞

本研究にて使用しましたデータサンプルの採取・分析および学会発表などは、一部を除き全て平成 23 年度文科省科研費補助金（基盤研究 C：「都市部の団地に暮らす高齢者の社会的孤立」、課題番号：23530654、研究代表者：安藤孝敏教授）、および平成 26 年度文部科学省科研費補助金（基盤研究 C：「被援助志向性が低い高齢者への支援方略に関する研究」、課題番号：26380671、研究代表者：安藤孝敏教授）を受けて行われました。

本論文を執筆するにあたり、終始研究室内外にてご指導、ご助言をいただきました安藤孝敏教授、また専攻ワークショップをはじめとする様々な御講義にてご指導、ご助言をいただきました志田基与師教授、長谷部英一准教授、周佐喜和教授をはじめとする環境イノベーションマネジメント専攻の先生方に、心より御礼申し上げます。また、一部研究におけるデータサンプルの採取にご協力をいただきました東京都健康長寿医療センター、社会参加と地域保健チームの藤原佳典研究部長をはじめとする研究員の皆様にも厚く御礼申し上げます。

そして本研究を進めるにあたっては、九州産業大学の小池高史講師、木村由香院生をはじめとする本学安藤研究室の関係者の皆様に多くのご助言をいただくとともに、精神面でも強く支えていただきました。深く御礼申し上げます。

本研究が地域にお住まいの多くの高齢者の方々によるご協力のもとで行われたことを心に留め、成果を社会へ還元できるよう、引き続き研究に邁進して参る所存です。末筆ながら皆様に重ねて御礼申し上げますとともに、何卒今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

## 資料

### 1. 郵送調査票

- (1) 2013年2月（研究Ⅰ）
- (2) 2014年1月（研究Ⅰ）
- (3) 2014年12月（研究Ⅲ）
- (4) 2016年7月（研究Ⅳ）

### 2. インタビュー調査関連資料（研究Ⅴ）

- (1) 調査依頼書
- (2) 調査概要案内書
- (3) 承諾書
- (4) インタビューガイド



## 公田町団地住民の生活と社会関係に関するアンケート

2013年2月

私たち横浜国立大学安藤研究室は、都市部の団地で暮らされている高齢者の方々の生活の様子や他人との付き合いの様子について、研究しております。このアンケートでは、公田町団地に住む高齢者の皆様の普段の生活や交流の様子についてお聞きします。このアンケートで得られた結果は、団地で暮らす高齢者の方々へのよりよい生活サポートを考えていくための資料となります。皆さまには、アンケートの趣旨をご理解いただき、ぜひご協力いただけますようお願い申し上げます。

- ご回答は、大部分、あてはまるものの番号に○をつけていただく形式です。
- ご回答は統計的に処理（たとえば、「はい」が10%など）しますので、個々の回答内容が外部にもれることは決してありません。
- 教えていただいた個人情報につきましては、研究目的以外に利用することは決してありません。
- ご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。



調査主体：横浜国立大学 教育人間科学部 安藤孝敏研究室

調査委託先：社団法人 よろん かがく きょうかい 輿論科学協会

東京都渋谷区千駄ヶ谷4-8-6

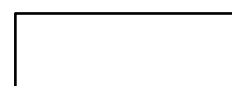
電話：03-3401-1131（平日の10時～18時）

担当：調査企画部 島田

ご回答いただいたアンケートは、同封の封筒（茶封筒：切手不要、そのままポストに入れてください）にて**2月22日（金）**までにお送りください。

なお、ご回答いただいた方には、お礼として500円の図書カードをお送りいたしますので、同封の謝礼送付用ラベルにご住所とお名前をご記入いただき、アンケート票と一緒にお願いします。

質問は次のページから始まります。



## ●外出や社会関係について●

問 1 現在、あなたは週に何日ほど外出されますか。この中から1つだけお答えください。

- |            |              |            |
|------------|--------------|------------|
| 1. ほぼ毎日    | 2. 週 5~6 日   | 3. 週 3~4 日 |
| 4. 週 1~2 日 | 5. ほとんど外出しない |            |

問 2. あなたは、ご近所の人とどの程度おつきあいをされていますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. お互いに訪問しあう人がいる  | 2. 立ち話をする程度の人がいる |
| 3. あいさつをする程度の人がいる | 4. つきあいはない       |

問 3. あなたは、ご近所の方とのおつきあいに、どの程度満足されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |          |         |               |            |
|----------|---------|---------------|------------|
| 1. とても満足 | 2. やや満足 | 3. あまり満足していない | 4. 満足していない |
|----------|---------|---------------|------------|

問 4 現在、グループや団体で自主的に行われている趣味や学習、健康、体力づくりなどの活動に参加されていますか。

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 参加している | 2. 参加していない |
|-----------|------------|

問 5 現在、自治会や町内会の活動に積極的に参加されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1. とても積極的に参加している  | 2. 積極的に参加している  |
| 3. あまり積極的に参加していない | 4. ほとんど参加していない |

問 6 あなたには、公田町団地の中で名前と住所（部屋番号）を知っている人が何人くらいいますか。（数字をご記入ください）

\_\_\_\_\_人くらい

問 7 あなたには、公田町団地の中で名前は知っているが、住所（部屋番号）は知らない人が何人くらいいますか。（数字をご記入ください）

\_\_\_\_\_人くらい

問 8 あなたには、公田町団地の中で名前も住所も知らないが、顔見知りの方が何人くらいいますか。(数字をご記入ください)

_____人くらい
-----------

問 9. 別居している子どもの家族と、会ったり、一緒に出かけたりすることはどのくらいありますか。この中から1つだけお答えください。

1. 週に6、7回(ほぼ毎日)	2. 週に4、5回	3. 週に2、3回
4. 週に1回くらい	5. 月に2、3回	6. 月に1回くらい
7. 月に1回より少ない	8. まったくない	9. いない

問 10. 別居している子どもの家族と、電話で話すことはどのくらいありますか。電子メールやファックスでのやりとりも含みます。この中から1つだけお答えください。

1. 週に6、7回(ほぼ毎日)	2. 週に4、5回	3. 週に2、3回
4. 週に1回くらい	5. 月に2、3回	6. 月に1回くらい
7. 月に1回より少ない	8. まったくない	9. いない

問 11. 友人と会ったり、一緒に出かけたりすることはどのくらいありますか。この中から1つだけお答えください。

1. 週に6、7回(ほぼ毎日)	2. 週に4、5回	3. 週に2、3回
4. 週に1回くらい	5. 月に2、3回	6. 月に1回くらい
7. 月に1回より少ない	8. まったくない	

問 12. 友人と、電話で話すことはどのくらいありますか。電子メールやファックスでのやりとりも含みます。この中から1つだけお答えください。

1. 週に6、7回(ほぼ毎日)	2. 週に4、5回	3. 週に2、3回
4. 週に1回くらい	5. 月に2、3回	6. 月に1回くらい
7. 月に1回より少ない	8. まったくない	

問 13 あなたは、次のそれぞれについて、どのくらいあてはまりますか。1つずつ○をつけて、お答えください。

		あてはまらない	あてはまらない どちらかといえば	どちらかといえば いえない	あてはまる どちらかといえば	あてはまる
(1)	自分は、よほどのことがない限り、人に相談することがない。	1	2	3	4	5
(2)	人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。	1	2	3	4	5
(3)	何事も他人に頼らず、自分で解決したい。	1	2	3	4	5
(4)	自分が困っているときには、話を聞いてくれる人が欲しい。	1	2	3	4	5
(5)	自分が困っているとき、周りの人には、そっとしておいて欲しい。	1	2	3	4	5
(6)	困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい。	1	2	3	4	5
(7)	困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人が欲しい。	1	2	3	4	5
(8)	他人の援助や助言は、あまり役立たないと思っている。	1	2	3	4	5
(9)	自分は、人に相談したり援助を求める時、いつも心苦しさを感ずる。	1	2	3	4	5
(10)	他人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	1	2	3	4	5
(11)	今後も、自分の周りの人に助けられながら、うまくやっていきたい。	1	2	3	4	5

問 14 日々の生活の中で困ったことがあった時に、誰に手助けしてもらいたいと思いますか。この中から1つだけお答えください。

1. 家族や親戚	2. 友人	3. 近所の人
4. 行政	5. 自治会やNPO	6. 民生委員
7. その他（具体的に		)

問 15 あなたの現在の気持ちについてうかがいます。1つずつ○をつけて、お答えください。

(1)	あなたはまわりの人たちとうまく いっていると思いますか。	1. そう思う	2. そうは思わない
(2)	あなたは人とのつきあいがいい方 ですか。	1. ない方だ	2. ある方だ
(3)	あなたには親しくしている人がいま すか。	1. いる	2. いない
(4)	あなたのことを本当によくわかって くれる人は誰もいないと思いますか。	1. いないと思う	2. いると思う
(5)	あなたには何かやろうとした時、一緒 にできる人がいますか。	1. いる	2. いない
(6)	あなたはほかの人たちから孤立して いるように思いますか。	1. そう思う	2. そうは思わない
(7)	あなたのことを本当に理解してくれ る人がいますか。	1. いる	2. いない
(8)	あなたはひとりぼっちだと感 じますか。	1. 感じる	2. 感じない
(9)	あなたのまわりには心の通いあう人 がいますか。	1. いる	2. いない
(10)	あなたには話し相手がいますか。	1. いる	2. いない

### ●「お互いさまねっと公田町団地」について●

問 16 NPO 法人・お互いさまねっと公田町団地をご存知ですか。

1. 知っている	2. 知らない	3. <u>スタッフをしている</u>
----------	---------	---------------------



問 19 へお進みください。

問 17 多目的拠点「いこい」を利用されていますか。

1. よく利用している	2. 利用したことはある	3. 利用したことはない
-------------	--------------	--------------

問 18 「あおぞら市」(火曜の生鮮品販売会)を利用されていますか。

1. よく利用している	2. 利用したことはある	3. 利用したことはない
-------------	--------------	--------------

●最後に、あなた自身のことについて●

問 19 あなたの性別はどちらですか。

- |       |       |
|-------|-------|
| 1. 男性 | 2. 女性 |
|-------|-------|

問 20 あなたの生年月日はいつですか。  
(元号に○をつけ、数字をご記入ください)

明治	大正			
昭和		年	月	日

問 21. あなたには、現在、配偶者はいらっしゃいますか。この中から1つだけお答えください。

- |                    |         |         |       |
|--------------------|---------|---------|-------|
| 1. いる(内縁関係、事実婚を含む) | 2. 離別した | 3. 死別した | 4. 未婚 |
|--------------------|---------|---------|-------|

問 22 現在、一緒にお住まいの方は、次のうちどなたですか。あてはまるものをいくつでもお答えください。

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1. ひとり暮らし   | 2. 配偶者(夫または妻) |
| 3. その他(具体的に | )             |

問 23. 別居している子どものなかで、最も近くに住んでいる方のお宅は、あなたのご自宅から、片道でどのくらい時間がかかりますか。よく使う交通手段でお答え下さい。この中から1つだけお答えください。

- |          |              |              |
|----------|--------------|--------------|
| 1. 10分未満 | 2. 10分~30分未満 | 3. 30分~1時間未満 |
| 4. 1時間以上 | 5. いない       |              |

問 24 あなたの現在の健康状態は、いかがですか。この中から1つだけお答えください。

- |       |         |            |         |
|-------|---------|------------|---------|
| 1. よい | 2. まあよい | 3. あまりよくない | 4. よくない |
|-------|---------|------------|---------|

問 25 あなたの日常の移動能力は、次のどれにあてはまりますか。普段行っていないくても、行える能力がある番号を1つだけお答えください。

- |   |
|---|
| 1. 自転車、車、バス、電車を使ってひとりで外出できる                 |
| 2. 家庭内および隣近所では、ほぼ不自由なく動き活動できるが、ひとりで遠出はできない  |
| 3. 少しは動ける（庭先に出してみる、小鳥の世話をする、簡単な縫い物などをする程度）  |
| 4. 起きてはいるが、あまり動けない（床から離れている時間の方が多い）         |
| 5. 寝たきりまたは、寝たり起きたり（床は常時敷いてあり、トイレ・食事には起きてくる） |

問 26 現在、ホームヘルパーやデイサービスなどの介護サービスを週にどのくらい利用されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |        |          |            |
|--------|----------|------------|
| 1. 毎日  | 2. 週5~6日 | 3. 週3~4日   |
| 4. 週2日 | 5. 週1日   | 6. 利用していない |

問 27 あなたの世帯の、今の暮らし向きはいかがですか。この中から1つだけお答えください。

- |             |             |       |
|-------------|-------------|-------|
| 1. 大変ゆとりがある | 2. ややゆとりがある | 3. 普通 |
| 4. やや苦しい    | 5. 大変苦しい    |       |

問 28 あなたが最後に卒業した学校は次のどれにあたりますか。この中から1つだけお答えください。

- |                 |                                |
|-----------------|--------------------------------|
| 1. 学校には行かなかった   | 2. 小学校                         |
| 3. 中学校（旧制高等小学校） | 4. 高等学校（旧制中学校）                 |
| 5. 短期大学・専門学校    | 6. 大学                          |
| 7. 大学院          | 8. その他（ <input type="text"/> ） |

問 29 あなたは、公田町団地に住んで何年になりますか。（数字をご記入ください）

<input type="text"/> 年
------------------------

これで終わりです。長時間にわたり、ご協力どうもありがとうございました。

## 高齢者の生活と社会関係に関するアンケート

2014年1月

私たち横浜国立大学安藤研究室は、都市部で暮らされている高齢者の方々の生活の様子や他人との付き合いの様子について、研究しております。このアンケートでは、皆様の普段の生活や交流の様子についてお聞きします。このアンケートで得られた結果は、地域で暮らす高齢者の方々へのよりよい生活サポートを考えていくための資料となります。皆さまには、アンケートの趣旨をご理解いただき、ぜひご協力いただけますようお願い申し上げます。

- ご回答は、大部分、あてはまるものの番号に○をつけていただく形式です。
- ご回答は統計的に処理（たとえば、「はい」が10%など）しますので、個々の回答内容が外部にもれることは決してありません。
- 教えていただいた個人情報につきましては、研究目的以外に利用することは決してありません。
- ご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。



調査主体：横浜国立大学 教育人間科学部 安藤孝敏研究室

調査委託先：株式会社朝日エル

〒104-0045

中央区築地 2-12-10 築地MFビル 26号館 5階

電話：03-5565-4911

質問は次のページから始まります。



## 外出や社会関係について●

問1 現在、あなたは週に何日ほど外出されますか。この中から1つだけお答えください。

- |          |              |          |
|----------|--------------|----------|
| 1. ほぼ毎日  | 2. 週5~6日     | 3. 週3~4日 |
| 4. 週1~2日 | 5. ほとんど外出しない |          |

問2 あなたは、ご近所の人とどの程度おつきあいをされていますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. お互いに訪問しあう人がいる  | 2. 立ち話をする程度の人がいる |
| 3. あいさつをする程度の人がいる | 4. つきあいはない       |

問3 あなたは、ご近所の方とのおつきあいに、どの程度満足されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |          |         |               |            |
|----------|---------|---------------|------------|
| 1. とても満足 | 2. やや満足 | 3. あまり満足していない | 4. 満足していない |
|----------|---------|---------------|------------|

問4 現在、グループや団体で自主的に行われている趣味や学習、健康、体力づくりなどの活動に参加されていますか。

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 参加している | 2. 参加していない |
|-----------|------------|

問5 現在、自治会や町内会の活動に積極的に参加されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1. とても積極的に参加している  | 2. 積極的に参加している  |
| 3. あまり積極的に参加していない | 4. ほとんど参加していない |

問6 別居している子どもの家族と、会ったり、一緒に出かけたりすることはどのくらいありますか。この中から1つだけお答えください。

- |                 |           |            |
|-----------------|-----------|------------|
| 1. 週に6、7回(ほぼ毎日) | 2. 週に4、5回 | 3. 週に2、3回  |
| 4. 週に1回くらい      | 5. 月に2、3回 | 6. 月に1回くらい |
| 7. 月に1回より少ない    | 8. まったくない | 9. いない     |

問7 別居している子どもの家族と、電話で話すことはどのくらいありますか。

電子メールやファックスでのやりとりも含みます。この中から1つだけお答えください。

- |                 |           |            |
|-----------------|-----------|------------|
| 1. 週に6、7回(ほぼ毎日) | 2. 週に4、5回 | 3. 週に2、3回  |
| 4. 週に1回くらい      | 5. 月に2、3回 | 6. 月に1回くらい |
| 7. 月に1回より少ない    | 8. まったくない | 9. いない     |

問8 友人と会ったり、一緒に出かけたりすることはどのくらいありますか。この中から1つだけお答えください。

- |                 |           |            |
|-----------------|-----------|------------|
| 1. 週に6、7回(ほぼ毎日) | 2. 週に4、5回 | 3. 週に2、3回  |
| 4. 週に1回くらい      | 5. 月に2、3回 | 6. 月に1回くらい |
| 7. 月に1回より少ない    | 8. まったくない |            |

問9 友人と、電話で話すことはどのくらいありますか。電子メールやファックスでのやりとりも含みます。この中から1つだけお答えください。

- |                 |           |            |
|-----------------|-----------|------------|
| 1. 週に6、7回(ほぼ毎日) | 2. 週に4、5回 | 3. 週に2、3回  |
| 4. 週に1回くらい      | 5. 月に2、3回 | 6. 月に1回くらい |
| 7. 月に1回より少ない    | 8. まったくない |            |

問10 あなたの現在の気持ちについてうかがいます。1つずつ○をつけて、お答えください。

(1)	あなたはまわりの人たちとうまくいっていると思いますか。	1. そう思う	2. そうは思わない
(2)	あなたは人とのつきあいがいい方ですか。	1. ない方だ	2. ある方だ
(3)	あなたには親しくしている人がいますか。	1. いる	2. いない
(4)	あなたのことを本当によくわかってくれる人は誰もいないと思いますか。	1. いないと思う	2. いると思う
(5)	あなたには何かやろうとした時、一緒にできる人がいますか。	1. いる	2. いない
(6)	あなたはほかの人たちから孤立しているように思いますか。	1. そう思う	2. そうは思わない
(7)	あなたのことを本当に理解してくれる人がいますか。	1. いる	2. いない
(8)	あなたはひとりぼっちだと感じますか。	1. 感じる	2. 感じない
(9)	あなたのまわりには心の通いあう人がいますか。	1. いる	2. いない
(10)	あなたには話し相手がありますか。	1. いる	2. いない

問 11 あなたは、次のそれぞれについて、どのくらいあてはまりますか。1つずつ○をつけて、お答えください。

		あてはまらない	あてはまらない どちらかといえば	どちらかといえば いえない	あてはまる どちらかといえば	あてはまる
(1)	自分は、よほどのことがない限り、人に相談することがない。	1	2	3	4	5
(2)	人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。	1	2	3	4	5
(3)	何事も他人に頼らず、自分で解決したい。	1	2	3	4	5
(4)	自分が困っているときには、話を聞いてくれる人が欲しい。	1	2	3	4	5
(5)	自分が困っているとき、周りの人には、そっとしておいて欲しい。	1	2	3	4	5
(6)	困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい。	1	2	3	4	5
(7)	困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人が欲しい。	1	2	3	4	5
(8)	他人の援助や助言は、あまり役立たないと思っている。	1	2	3	4	5
(9)	自分は、人に相談したり援助を求める時、いつも心苦しさを感じる。	1	2	3	4	5
(10)	他人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	1	2	3	4	5
(11)	今後も、自分の周りの人に助けられながら、うまくやっていきたい。	1	2	3	4	5

問 12 日々の生活の中で困ったことがあった時に、誰に手助けしてもらいたいと思いますか。この中から1つだけお答えください。

1. 家族や親戚	2. 友人	3. 近所の人
4. 行政	5. 自治会やNPO	6. 民生委員
7. その他（具体的に		)

●最後に、あなた自身のことについて●

問13 あなたの性別はどちらですか。

- |       |       |
|-------|-------|
| 1. 男性 | 2. 女性 |
|-------|-------|

問14 あなたの生年月日はいつですか。元号に○をつけ、数字をご記入ください

明治	大正			
昭和		年	月	日

問15 あなたには、現在、配偶者はいらっしゃいますか。この中から1つだけお答えください。

- |                    |         |         |       |
|--------------------|---------|---------|-------|
| 1. いる（内縁関係、事実婚を含む） | 2. 離別した | 3. 死別した | 4. 未婚 |
|--------------------|---------|---------|-------|

問16 現在、一緒にお住まいの方は、次のうちどなたですか。あてはまるものをいくつでもお答えください。

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1. ひとり暮らし   | 2. 配偶者（夫または妻） |
| 3. その他（具体的に | )             |

問17 【問16で「1. ひとり暮らし」と答えた方へ】ひとり暮らしをされて何年になりますか。数字をご記入ください

_____年
--------

問18 別居している子どものなかで、最も近くに住んでいる方のお宅は、あなたのご自宅から、片道でどのくらい時間がかかりますか。よく使う交通手段でお答え下さい。この中から1つだけお答えください。

- |          |              |              |
|----------|--------------|--------------|
| 1. 10分未満 | 2. 10分～30分未満 | 3. 30分～1時間未満 |
| 4. 1時間以上 | 5. いない       |              |

問19 あなたの現在の健康状態は、いかがですか。この中から1つだけお答えください。

- |       |         |            |         |
|-------|---------|------------|---------|
| 1. よい | 2. まあよい | 3. あまりよくない | 4. よくない |
|-------|---------|------------|---------|



## 高齢者の生活と社会関係に関するアンケート

2014年12月

私たち横浜国立大学安藤研究室は、都市部で暮らされている高齢者の方々の生活の様子や他人との付き合いの様子について、研究しております。このアンケートでは、皆様の普段の生活や交流のご様子についてお聞きします。このアンケートで得られた結果は、地域で暮らす高齢者の方々へのよりよい生活サポートを考えていくための資料となります。皆さまには、アンケートの趣旨をご理解いただき、ぜひご協力いただけますようお願い申し上げます。

- ご回答は、大部分、あてはまるものの番号に○をつけていただく形式です。
- ご回答は統計的に処理（たとえば、「はい」が10%など）しますので、個々の回答内容が外部にもれることは決してありません。
- 教えていただいた個人情報につきましては、研究目的以外に利用することは決してありません。
- ご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。
- 記入後同封の返送用封筒にて平成27年1月10日までにご投函ください



調査主体：横浜国立大学 教育人間科学部 安藤孝敏研究室  
TEL 045-339-3270

調査委託先：株式会社 山手情報処理センター  
TEL 03-3949-4521

質問は次のページから始まります。

## ●外出や社会関係について●

問 1 現在、あなたは週に何日ほど外出されますか。この中から1つだけお答えください。

- |            |              |            |
|------------|--------------|------------|
| 1. ほぼ毎日    | 2. 週 5~6 日   | 3. 週 3~4 日 |
| 4. 週 1~2 日 | 5. ほとんど外出しない |            |

問 2 あなたは、ご近所の人とどの程度おつきあいをされていますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. お互いに訪問しあう人がいる  | 2. 立ち話をする程度の人がいる |
| 3. あいさつをする程度の人がいる | 4. つきあいはない       |

問 3 あなたは、ご近所の方とのおつきあいに、どの程度満足されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |          |         |               |            |
|----------|---------|---------------|------------|
| 1. とても満足 | 2. やや満足 | 3. あまり満足していない | 4. 満足していない |
|----------|---------|---------------|------------|

問 4 現在、グループや団体で自主的に行われている趣味や学習、健康、体力づくりなどの活動に参加されていますか。

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 参加している | 2. 参加していない |
|-----------|------------|

問 5 現在、自治会や町内会の活動に積極的に参加されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1. とても積極的に参加している  | 2. 積極的に参加している  |
| 3. あまり積極的に参加していない | 4. ほとんど参加していない |

問 6 別居している子どもの家族と、会ったり、一緒に出かけたりすることはどのくらいありますか。この中から1つだけお答えください。

- |                 |           |            |
|-----------------|-----------|------------|
| 1. 週に6、7回（ほぼ毎日） | 2. 週に4、5回 | 3. 週に2、3回  |
| 4. 週に1回くらい      | 5. 月に2、3回 | 6. 月に1回くらい |
| 7. 月に1回より少ない    | 8. まったくない | 9. いない     |

問 7 友人と会ったり、一緒に出かけたりすることはどのくらいありますか。この中から1つだけお答えください。

- |                 |           |            |
|-----------------|-----------|------------|
| 1. 週に6、7回（ほぼ毎日） | 2. 週に4、5回 | 3. 週に2、3回  |
| 4. 週に1回くらい      | 5. 月に2、3回 | 6. 月に1回くらい |
| 7. 月に1回より少ない    | 8. まったくない | 9. いない     |

問8 あなたの現在の気持ちについてうかがいます。(1)～(10)のそれぞれについて1つずつ○をつけてお答えください。

(1)	あなたはまわりの人たちとうまく いっていると思いますか。	1. そう思う	2. そうは思わない
(2)	あなたは人とのつきあいがいい方 ですか。	1. ない方だ	2. ある方だ
(3)	あなたには親しくしている人がいま すか。	1. いる	2. いない
(4)	あなたのことを本当によくわかって くれる人は誰もいないと思いますか。	1. いないと思う	2. いると思う
(5)	あなたには何かやろうとした時、一緒 にできる人がいますか。	1. いる	2. いない
(6)	あなたはほかの人たちから孤立して いるように思いますか。	1. そう思う	2. そうは思わない
(7)	あなたのことを本当に理解してくれ る人がいますか。	1. いる	2. いない
(8)	あなたはひとりぼっちだと感 じますか。	1. 感じる	2. 感じない
(9)	あなたのまわりには心の通いあう人 がいますか。	1. いる	2. いない
(10)	あなたには話し相手がいますか。	1. いる	2. いない

問9 日々の生活の中で困ったことがあった時に、誰に手助けしてもらいたいと思  
いますか。この中から1つだけお答えください。

1. 家族や親戚	2. 友人	3. 近所の人
4. 行政	5. 自治会やNPO	6. 民生委員
7. その他（具体的に		）

問10 あなたは現在、収入を伴う仕事をされていますか。パート・アルバイトや家業の  
手伝いも含めて、この中から1つだけお答えください。

1. フルタイムで働いている（週35時間以上の労働）
2. 短時間や不規則の仕事をしている（週35時間未満の労働）
3. 仕事はしていない



問 11 あなたは、以下の内容について、どのくらいあてはまりますか。(1)～(12)のそれぞれについて、当てはまる番号に1つずつ○をつけてお答えください。

	あてはまる	あてはまる どちらかといえば	いえない どちらでもない	あてはまらない どちらかといえば	あてはまらない
(1) 自分が困っているときには、話を聞いてくれる身近な人が欲しい。	1	2	3	4	5
(2) 人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。	1	2	3	4	5
(3) 困っていることを解決するために、身近な人からの助言や援助が欲しい。	1	2	3	4	5
(4) 身近な人に相談したり援助を求める時、いつも心苦しさをを感じる。	1	2	3	4	5
(5) 困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる身近な人が欲しい。	1	2	3	4	5
(6) 身近な人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	1	2	3	4	5
(7) 自分が困っているときには、行政にも相談にのってほしい。	1	2	3	4	5
(8) 公的な支援に頼ることは、恥ずかしいことだと思う。	1	2	3	4	5
(9) 困っていることを解決するために、行政からの助言や援助が欲しい。	1	2	3	4	5
(10) 可能な限り、公的な支援には頼らずに暮らしていきたいと思う。	1	2	3	4	5
(11) 困っていることを解決するためには、進んで行政の手を借りたい。	1	2	3	4	5
(12) 公的な機関からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	1	2	3	4	5

●あなた自身のことについて●

問12 あなたの性別はどちらですか。

- |       |       |
|-------|-------|
| 1. 男性 | 2. 女性 |
|-------|-------|

問13 あなたの生年月日はいつですか。元号に○をつけ、数字をご記入ください。

明治	大正				
昭和		年	月	日	

問14 あなたには、現在、配偶者はいらっしゃいますか。この中から1つだけお答えください。

- |                    |         |         |       |
|--------------------|---------|---------|-------|
| 1. いる（内縁関係、事実婚を含む） | 2. 離別した | 3. 死別した | 4. 未婚 |
|--------------------|---------|---------|-------|

問15 現在、一緒にお住まいの方は、次のうちどなたですか。あてはまるものをいくつでもお答えください。

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1. ひとり暮らし   | 2. 配偶者（夫または妻） |
| 3. その他（具体的に | )             |

問16 【問15で「1. ひとり暮らし」と答えた方へ】ひとり暮らしをされて何年になりますか。数字をご記入ください。

年
---

問17 別居している子どものなかで、最も近くに住んでいる方のお宅は、あなたのご自宅から、片道でどのくらい時間がかかりますか。よく使う交通手段でお答え下さい。この中から1つだけお答えください。

- |          |              |              |
|----------|--------------|--------------|
| 1. 10分未満 | 2. 10分～30分未満 | 3. 30分～1時間未満 |
| 4. 1時間以上 | 5. いない       |              |

問18 あなたの現在の健康状態は、いかがですか。この中から1つだけお答えください。

- |       |         |            |         |
|-------|---------|------------|---------|
| 1. よい | 2. まあよい | 3. あまりよくない | 4. よくない |
|-------|---------|------------|---------|

問 19 あなたの日常の移動能力は、次のどれにあてはまりますか。普段行っていなくても、行える能力がある番号を1つだけお答えください。

- |   |
|---|
| 1. 自転車、車、バス、電車を使ってひとりで外出できる                 |
| 2. 家庭内および隣近所では、ほぼ不自由なく動き活動できるが、ひとりで遠出はできない  |
| 3. 少しは動ける（庭先に出してみる、小鳥の世話をする、簡単な縫い物などをする程度）  |
| 4. 起きてはいるが、あまり動けない（床から離れている時間の方が多い）         |
| 5. 寝たきりまたは、寝たり起きたり（床は常時敷いてあり、トイレ・食事には起きてくる） |

問 20 現在、ホームヘルパーやデイサービスなどの介護サービスを週にどのくらい利用されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |        |          |            |
|--------|----------|------------|
| 1. 毎日  | 2. 週5~6日 | 3. 週3~4日   |
| 4. 週2日 | 5. 週1日   | 6. 利用していない |

問 21 あなたの世帯の、今の暮らし向きはいかがですか。この中から1つだけお答えください。

- |             |             |       |
|-------------|-------------|-------|
| 1. 大変ゆとりがある | 2. ややゆとりがある | 3. 普通 |
| 4. やや苦しい    | 5. 大変苦しい    |       |

問 22 あなたが最後に卒業した学校は次のどれにあたりますか。この中から1つだけお答えください。

- |                 |                                |
|-----------------|--------------------------------|
| 1. 学校には行かなかった   | 2. 小学校                         |
| 3. 中学校（旧制高等小学校） | 4. 高等学校（旧制中学校）                 |
| 5. 短期大学・専門学校    | 6. 大学                          |
| 7. 大学院          | 8. その他（                      ） |

問 23 あなたの現在のお住まいは次のどれですか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                                |
|-------------------|--------------------------------|
| 1. 一戸建て持ち家（借地を含む） | 2. 分譲マンション                     |
| 3. 公営・公社・公団の賃貸住宅  | 4. 民間の一戸建て借家                   |
| 5. 民間の賃貸マンション     | 6. 民間のアパート・長屋                  |
| 7. 社宅・官舎等の給与住宅    | 8. その他（                      ） |

問 24 あなたは、現在のところに住んで何年になりますか。数字をご記入ください

_____ 年
---------

問 25 あなたは現在、以下の行政または民間によるサービスや支援の提供を受けていますか。また現在受けていないものについては、今後受けることに対してどの程度の希望を持っていますか。(1)～(12)まで、あてはまる番号に1つずつ〇をつけてください。

<p>現在受けているサービスや支援 ⇒「〇」に〇をつける</p>		<p>【現在受けていない】 ⇒今後受けることに対する希望について、 1～5のうちひとつに〇をつける</p>					
		希望している	どちらかといえば希望している	どちらかといえばいない	どちらかといえば希望していない	希望していない	
(1)	体調や健康状態に応じた地域活動やイベントに関する情報の提供	0	1	2	3	4	5
(2)	健康状態の詳細な把握を含めた、個人向け見守りサービスの提供	0	1	2	3	4	5
(3)	個人の希望や必要に応じた、柔軟で細やかなケアや生活支援の提供	0	1	2	3	4	5
(4)	新しい情報や知識を得るための勉強会やセミナーを受講する機会の提供	0	1	2	3	4	5
(5)	イベントやミニ講座などを通じた、同じ地域の住民同士による交流機会の提供	0	1	2	3	4	5
(6)	元気なうちから、様々な専門家（介護・医療従事者など）との繋がりを持つ機会の提供	0	1	2	3	4	5

【現在受けている】  
↓

➡ 裏面に続きます。

<p>現在受けているサービスや支援 ⇒「0」に○をつける</p>		<p>【現在受けている】 ↓</p>	<p>【現在受けていない】 ⇒今後受けることに対する希望について、 1~5のうちひとつに○をつける</p>				
			<p>希望している</p>	<p>希望している どちらかといえば</p>	<p>いえない どちらとも</p>	<p>希望していない どちらかといえば</p>	<p>希望していない</p>
(7)	気軽に利用できる居場所としての施設やサロンに関する情報の提供	0	1	2	3	4	5
(8)	少ない負担で心身の健康チェックを受けられる機会の提供	0	1	2	3	4	5
(9)	イベントやミニ講座などを通じた、子どもや若年世代との交流機会の提供	0	1	2	3	4	5
(10)	自身の能力を生かすことのできる再雇用先の紹介や就労支援の提供	0	1	2	3	4	5
(11)	自身の経験や能力を生かした地域貢献の機会の提供	0	1	2	3	4	5
(12)	いわゆる「終活」(相続や身辺整理の計画など)に関する支援の提供	0	1	2	3	4	5

これで終わりです。長時間にわたり、ご協力ありがとうございました。

## 高齢者の生活と社会関係に関するアンケート

2016年〇月

私たち横浜国立大学安藤研究室は、都市部で暮らされている高齢者の方々の生活の様子や他人との付き合いの様子について、研究しております。このアンケートでは、皆様の普段の生活や交流のご様子についてお聞きします。このアンケートで得られた結果は、地域で暮らす高齢者の方々へのよりよい生活サポートを考えていくための資料となります。皆さまには、アンケートの趣旨をご理解いただき、ぜひご協力いただけますようお願い申し上げます。

- ご回答は、大部分、あてはまるものの番号に〇をつけていただく形式です。
- ご回答は統計的に処理（たとえば、「はい」が10%など）しますので、個々の回答内容が外部にもれることは決してありません。
- 教えていただいた個人情報につきましては、研究目的以外に利用することは決してありません。
- ご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。
- 記入後同封の返送用封筒にて平成28年〇月〇日までにご投函ください。



調査主体：横浜国立大学 教育人間科学部 安藤孝敏研究室

調査委託先：株式会社 山手情報処理センター

TEL 03-3949-4521

質問は次のページから始まります。

## ●外出や社会関係について●

問 1 現在、あなたは週に何日ほど外出されますか。この中から1つだけお答えください。

- |            |              |            |
|------------|--------------|------------|
| 1. ほぼ毎日    | 2. 週 5~6 日   | 3. 週 3~4 日 |
| 4. 週 1~2 日 | 5. ほとんど外出しない |            |

問 2 あなたは、ご近所の人とどの程度おつきあいをされていますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. お互いに訪問しあう人がいる  | 2. 立ち話をする程度の人がある |
| 3. あいさつをする程度の人がある | 4. つきあいはない       |

問 3 あなたは、ご近所の方とおつきあいに、どの程度満足されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |          |         |               |            |
|----------|---------|---------------|------------|
| 1. とても満足 | 2. やや満足 | 3. あまり満足していない | 4. 満足していない |
|----------|---------|---------------|------------|

問 4 現在、グループや団体で自主的に行われている趣味や学習、健康、体力づくりなどの活動に参加されていますか。

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 参加している | 2. 参加していない |
|-----------|------------|

問 5 現在、自治会や町内会の活動に積極的に参加されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1. とても積極的に参加している  | 2. 積極的に参加している  |
| 3. あまり積極的に参加していない | 4. ほとんど参加していない |

問 6 別居している子どもの家族と、会ったり、一緒に出かけたりすることはどのくらいありますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |             |              |
|-------------------|-------------|--------------|
| 1. 週に 6、7 回（ほぼ毎日） | 2. 週に 4、5 回 | 3. 週に 2、3 回  |
| 4. 週に 1 回くらい      | 5. 月に 2、3 回 | 6. 月に 1 回くらい |
| 7. 月に 1 回より少ない    | 8. まったくない   | 9. いない       |

問 7 友人と会ったり、一緒に出かけたりすることはどのくらいありますか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |             |              |
|-------------------|-------------|--------------|
| 1. 週に 6、7 回（ほぼ毎日） | 2. 週に 4、5 回 | 3. 週に 2、3 回  |
| 4. 週に 1 回くらい      | 5. 月に 2、3 回 | 6. 月に 1 回くらい |
| 7. 月に 1 回より少ない    | 8. まったくない   | 9. いない       |

問8 あなたの現在の気持ちについてうかがいます。(1)～(10)のそれぞれについて1つずつ○をつけてお答えください。

(1)	あなたはまわりの人たちとうまく いっていると思いますか。	1. そう思う	2. そうは思わない
(2)	あなたは人とのつきあいがいい方ですか。	1. ない方だ	2. ある方だ
(3)	あなたには親しくしている人がいますか。	1. いる	2. いない
(4)	あなたのことを本当によくわかってくれる人は誰もいないと思いますか。	1. いないと思う	2. いると思う
(5)	あなたには何かやろうとした時、一緒にできる人がいますか。	1. いる	2. いない
(6)	あなたはほかの人たちから孤立しているように思いますか。	1. そう思う	2. そうは思わない
(7)	あなたのことを本当に理解してくれる人がいますか。	1. いる	2. いない
(8)	あなたはひとりぼっちだと感じますか。	1. 感じる	2. 感じない
(9)	あなたのまわりには心の通いあう人がいますか。	1. いる	2. いない
(10)	あなたには話し相手がありますか。	1. いる	2. いない

問9 日々の生活の中で困ったことがあった時に、**もっとも**誰に手助けしてもらいたいと思いますか。この中から1つだけお答えください。

1. 家族や親戚	2. 友人	3. 近所の人
4. 行政	5. 自治会やNPO	6. 民生委員
7. その他（具体的に		

問10 あなたは現在、収入を伴う仕事をされていますか。パート・アルバイトや家業の手伝いも含めて、この中から1つだけお答えください。

1. フルタイムで働いている（週35時間以上の労働）
2. 短時間や不規則の仕事をしている（週35時間未満の労働）
3. 仕事はしていない



問 11 あなたは、以下の内容について、どのくらいあてはまりますか。(1)～(12)のそれぞれについて、当てはまる番号に1つずつ○をつけてお答えください。

		あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
(1)	自分が困っているときには、話を聞いてくれる身近な人が欲しい。	1	2	3	4	5
(2)	人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う。	1	2	3	4	5
(3)	困っていることを解決するために、身近な人からの助言や援助が欲しい。	1	2	3	4	5
(4)	身近な人に相談したり援助を求める時、いつも心苦しさを感ずる。	1	2	3	4	5
(5)	困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる身近な人が欲しい。	1	2	3	4	5
(6)	身近な人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	1	2	3	4	5
(7)	自分が困っているときには、行政にも相談にのってほしい。	1	2	3	4	5
(8)	公的な支援に頼ることは、恥ずかしいことだと思う。	1	2	3	4	5
(9)	困っていることを解決するために、行政からの助言や援助が欲しい。	1	2	3	4	5
(10)	可能な限り、公的な支援には頼らずに暮らしていきたいと思う。	1	2	3	4	5
(11)	困っていることを解決するためには、進んで行政の手を借りたい。	1	2	3	4	5
(12)	公的な機関からの助言や援助を受けることに、抵抗がある。	1	2	3	4	5

問 12 あなたは、以下のそれぞれの項目について、自分にどのくらいあてはまりますか。

(1)～(12)のそれぞれについて、当てはまる番号に1つずつ○をつけてお答えください。

		よくあてはまる	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない
(1)	よく考えれば大したことないと思えるようなことでも、わりと相談する	1	2	3	4	5	6	7
(2)	悩みが深刻で、一人で解決できなくても、相談はしない	1	2	3	4	5	6	7
(3)	相談より先に自分で試行錯誤し、いきづまったら相談する。	1	2	3	4	5	6	7
(4)	悩みを抱えたら、それがあまり深刻な物でなくても、相談する	1	2	3	4	5	6	7
(5)	悩みが自分では解決できないようなものでも、相談はしない	1	2	3	4	5	6	7
(6)	先に自分で、いろいろとやってみてから相談する	1	2	3	4	5	6	7
(7)	比較的ささいな悩みでも、相談する	1	2	3	4	5	6	7
(8)	悩みは最後まで、自分一人がかかえる	1	2	3	4	5	6	7
(9)	少しつらくとも、自分で悩みに向き合い、それでも無理だったら相談する	1	2	3	4	5	6	7
(10)	困ったことがあったら、割とすぐに相談する	1	2	3	4	5	6	7
(11)	悩みがどのようなものでも、最後まで自分一人ががんばる	1	2	3	4	5	6	7
(12)	悩みが自分一人の力ではどうしようもなかった時は、相談する	1	2	3	4	5	6	7

問 13 あなたが知人や友人などの身近な人に悩みを相談するとすれば、以下のそれぞれについてどちらがより好ましいですか。それぞれ 1 つずつ〇をつけてお答えください。

(1)	相談する相手の性別	1. 男性	2. 女性	
(2)	相談する相手の年齢	1. 若年者 (~39 歳)	2. 中高年者 (40~64 歳)	3. 年配者 (65 歳~)
(3)	相談する相手の姿勢	1. 共感的	2. 指導的	
(4)	相談相手の、相談内容に対する知識量	1. 多い	2. 少ない	
(5)	相談するにあたっての、事前の約束	1. 必要	2. 不要	
(6)	相談する相手とのやり取りの方法	1. 対面相談	2. 電話相談	

問 14 あなたが専門機関や行政の担当者に悩みを相談するとすれば、以下のそれぞれについてどちらがより好ましいですか。それぞれ 1 つずつ〇をつけてお答えください。

(1)	相談する相手の性別	1. 男性	2. 女性	
(2)	相談する相手の年齢	1. 若年者 (~39 歳)	2. 中高年者 (40 歳~)	
(3)	相談する相手の姿勢	1. 共感的	2. 指導的	
(4)	相談相手の、相談内容に対する知識量	1. 多い	2. 少ない	
(5)	相談するにあたっての、事前の予約	1. 必要	2. 不要	
(6)	相談する相手とのやり取りの方法	1. 対面相談	2. 電話相談	

●あなた自身のことについて●

問 15 あなたの性別はどちらですか。

- |       |       |
|-------|-------|
| 1. 男性 | 2. 女性 |
|-------|-------|

問 16 あなたの生年月日はいつですか。元号に○をつけ、数字をご記入ください。

明治	大正				
昭和		年	月	日	

問 17 あなたには、現在、配偶者はいらっしゃいますか。この中から1つだけお答えください。

- |                    |         |         |       |
|--------------------|---------|---------|-------|
| 1. いる（内縁関係、事実婚を含む） | 2. 離別した | 3. 死別した | 4. 未婚 |
|--------------------|---------|---------|-------|

問 18 現在、一緒にお住まいの方は、次のうちどなたですか。あてはまるものをいくつでもお答えください。

- |           |               |             |   |
|-----------|---------------|-------------|---|
| 1. ひとり暮らし | 2. 配偶者（夫または妻） | 3. その他（具体的に | ) |
|-----------|---------------|-------------|---|

問 19 【問18で「1. ひとり暮らし」と答えた方へ】ひとり暮らしをされて何年になりますか。数字をご記入ください。

年
---

問 20 別居している子どものなかで、最も近くに住んでいる方のお宅は、あなたのご自宅から、片道でどのくらい時間がかかりますか。よく使う交通手段でお答え下さい。この中から1つだけお答えください。


- |          |              |              |
|----------|--------------|--------------|
| 1. 10分未満 | 2. 10分～30分未満 | 3. 30分～1時間未満 |
| 4. 1時間以上 | 5. いない       |              |

問 21 あなたの現在の健康状態は、いかがですか。この中から1つだけお答えください。

- |       |         |            |         |
|-------|---------|------------|---------|
| 1. よい | 2. まあよい | 3. あまりよくない | 4. よくない |
|-------|---------|------------|---------|

問 22 あなたの日常の移動能力は、次のどれにあてはまりますか。普段行っていないなくても、行える能力がある番号を1つだけお答えください。

- |   |
|---|
| 1. 自転車、車、バス、電車を使ってひとりで外出できる                 |
| 2. 家庭内および隣近所では、ほぼ不自由なく動き活動できるが、ひとりで遠出はできない  |
| 3. 少しは動ける（庭先に出てみる、小鳥の世話をする、簡単な縫い物などをする程度）   |
| 4. 起きてはいるが、あまり動けない（床から離れている時間の方が多い）         |
| 5. 寝たきりまたは、寝たり起きたり（床は常時敷いてあり、トイレ・食事には起きてくる） |

 裏面に続きます。
--

問 23 現在、ホームヘルパーやデイサービスなどの介護サービスを週にどのくらい利用されていますか。この中から1つだけお答えください。

- |        |          |            |
|--------|----------|------------|
| 1. 毎日  | 2. 週5~6日 | 3. 週3~4日   |
| 4. 週2日 | 5. 週1日   | 6. 利用していない |

問 24 あなたの世帯の、今の暮らし向きはいかがですか。この中から1つだけお答えください。

- |             |             |       |
|-------------|-------------|-------|
| 1. 大変ゆとりがある | 2. ややゆとりがある | 3. 普通 |
| 4. やや苦しい    | 5. 大変苦しい    |       |

問 25 あなたが最後に卒業した学校は次のどれにあたりますか。この中から1つだけお答えください。

- |                 |                                |
|-----------------|--------------------------------|
| 1. 学校には行かなかった   | 2. 小学校                         |
| 3. 中学校（旧制高等小学校） | 4. 高等学校（旧制中学校）                 |
| 5. 短期大学・専門学校    | 6. 大学                          |
| 7. 大学院          | 8. その他（                      ） |

問 26 あなたの現在のお住まいは次のどれですか。この中から1つだけお答えください。

- |                   |                                |
|-------------------|--------------------------------|
| 1. 一戸建て持ち家（借地を含む） | 2. 分譲マンション                     |
| 3. 公営・公社・公団の賃貸住宅  | 4. 民間の一戸建て借家                   |
| 5. 民間の賃貸マンション     | 6. 民間のアパート・長屋                  |
| 7. 社宅・官舎等の給与住宅    | 8. その他（                      ） |

問 27 あなたは、現在のところに住んで何年になりますか。数字をご記入ください

\_\_\_\_\_年

これで終わりです。長時間にわたり、ご協力ありがとうございました。

アンケートにご回答頂いた皆さまに、より深く話しをお聞きしたく後日インタビューをご依頼させて頂く予定です(任意)。またインタビュー以降も継続して調査研究を行いたいと考えております(任意)。そこで今後の研究に協力可能かお答え頂けないでしょうか。

- |                       |       |        |
|-----------------------|-------|--------|
| ①インタビューにも協力してもよい      | 1. はい | 2. いいえ |
| ②インタビュー以降の研究にも協力してもよい | 1. はい | 2. いいえ |

「1. はい」とお答えの方はお名前とご連絡先をご記入下さい。こちらより日時など連絡いたします。なおインタビューへご協力頂く方には心ばかりの謝礼を用意する予定です。

記入頂きました個人情報、この調査以外に使用することはございません。

【お名前】

【ご連絡先（住所・電話番号）】

平成 28 年 10 月吉日

平成 28 年度「高齢者の生活と社会関係に関するアンケート」  
インタビュー調査へのご協力をお願い

拝啓

初秋の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平素は、格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

このたび、横浜国立大学では、平成 28 年度「高齢者の生活と社会関係に関するアンケート」調査の一環として、横浜市内在住のシニアの皆様インタビュー調査を実施する運びとなりました。つきましては、下記の同封書類 2 点をご確認いただき、所定の方法にて協力の可否をお知らせください。

ご多忙のところ、お手数をお掛けしまして大変恐縮ですが、何卒ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

敬具

記

1. 「インタビュー実施までの流れ」  
(裏面：「インタビュー調査に関するご案内）」 1 部
  2. 「インタビュー調査承諾書」 1 部
- ※ この他に、承諾書返送用の封筒を同封しております。

以上

## インタビュー実施までの流れ

先日ご回答いただきました、横浜国立大学による「高齢者の生活と社会関係に関するアンケート」調査におきまして、インタビューへの協力にご内諾をいただいた方に、今回の書類一式をお送りしています。

同封の「インタビュー調査承諾書」に必要事項をご記入の上、**10月15日（土）までに**、返信用封筒にてお返事をいただければ幸いです。

※返信用封筒には切手を貼付しておりますので、そのままご投函ください。  
※承諾書にご記入いただいた個人情報、調査員が責任をもって管理し、調査終了後すみやかに破棄致します。

協力します



協力しません



ご協力が難しくなってしまった場合には、承諾書の「協力しません」に○を付けてください。

※ご協力が難しい場合も、承諾書を御返送いただきますようお願い致します。

「協力します」に○を付けていただいた方には、後日、大学の調査員からお電話を致します。承諾書にご記入いただいた内容をもとに、10月～11月の中で、インタビューを実施する日時や場所を調整させていただきます。

### インタビュー当日

インタビュー当日は、所定の日時・場所に大学の調査員が伺います。  
所要時間は、お一人あたり 1 時間程度を予定しております。

調査の詳細は 2 ページ目（裏面）をご覧ください。またご不明な点等ございましたら、裏面の問い合わせ先までご一報ください。

## ‘援助を受けること’ についてのインタビュー調査に関するご案内（詳細版）

### 1. 調査の目的

当調査は、横浜国立大学が主体となって実施するものです。シニア世代の皆さまの持つ日常生活における「援助を受けること」に対する考え方について、皆様の日頃の生活や体験から検討させていただくものです。他者から援助を受けることに対する皆さまの考え方をお聞かせいただき、今後の「より当事者目線に立った支援の提供のあり方」について検討することを目指しています。

### 2. 調査の方法

(ア)調査協力者：横浜市内在住の、一人暮らしのシニアの方 10 名程度

(イ)調査の実施：

同封の「インタビュー調査承諾書」にて、調査協力の可否をお知らせ下さい。ご承諾をいただいた場合には、お電話で日時・場所を調整のうえ、大学の調査員（1 名）が、およそ 1 時間程度のインタビュー調査（個別形式）をおこないます。なお分析のため、インタビューは録音し、逐語録として文字化します。その際、個人を特定できるような情報は全て削除します。

※1 ページ目（表面）にインタビュー実施までの流れを図として記載しております。

(ウ)インタビュー内容：

1. 現在における周囲との付き合いの様子について
2. 印象に残っている、「他人から助けてもらった経験」について
3. 「他人から援助を受けること」についてのご自身の考え方について

(エ)調査の実施時期：平成 28 年 10 月～平成 28 年 11 月頃

(オ)調査協力の謝礼：インタビュー調査にご協力頂きました皆さまには、ささやかではございますが、謝礼を用意させていただきます。

### 3. 結果の活用

インタビューの結果は、先に実施しましたアンケートの結果とあわせて、報告書やリーフレット、研究論文などの刊行物を通じて公表致します。その際は、個人を特定できるような情報は掲載致しません。

### 4. 実施主体および問い合わせ先

インタビュー調査担当者：<sup>たかはしともや</sup>高橋知也（横浜国立大学 安藤孝敏研究室）

電話（携帯）：090-2788-8114





高齢者インタビュー（援助要請）調査 インタビューガイド（L案）

インタビュー項目	具体的な内容		備考
基本情報の確認	①周囲の状況などについて		
	独居かどうか		現在独居状態にあるかを確認する
	別居家族がいるかどうか		別居子や配偶者の有無を確認する
	別居者との程度離れているか		別居者との地理的な距離について確認する
	ペットなどはいるか		犬や猫といったペットの有無を確認する
	友人との付き合い方		友人との接触頻度と、具体的な内容について尋ねる
	家族との付き合い方		家族との接触頻度と、具体的な内容について尋ねる
援助要請に対する考え方	②印象に残っている、援助を受けた経験（経験した時期や問題の大小は不問）		
	どのような問題が生じたか		どのような問題だったか、具体的に尋ねる。
	援助が必要と判断した理由は何か		何故、自分だけでは解決できないと感じたのか尋ねる
	援助を求めようと思いついた決断手はあったか		援助を受けようと思った決断手があったか尋ねる
	誰に対して援助を求めたか		援助を求めた相手について、具体的に尋ねる
	相手をどのようにして探したか		相手を探した手段について、尋ねる 候補が複数いた場合は、その中から対象を決定した方法も尋ねる
	求めた援助は応諾されたか		援助の申し入れに対する相手の応答や行動について尋ねる
	その時の気持ちはどうだったか		他者との援助関係を結んだ際に、何か思うところがあったか尋ねる
	援助を受けたことで、事態に変化は生じたか		援助を求めた前後での事態の変化について尋ねる
	その経験が、現在の援助を受けることに対する考え方に影響していると思うか		当時の経験が、今日の援助を受けることに対する考え方に対して何らかの影響をもたらしたか否かを尋ねる
	援助要請に対する考え方	③他者から援助を受けるといことについて	
他者から援助を受けることをどのように思うか		家族や友人からの援助	家族や友人などから援助を受けることに対する考え方について、可能な限り詳しく尋ねる
		公的な援助	行政や専門職者などから援助を受けることに対する考え方について、可能な限り詳しく尋ねる
そのように考えるのはなぜか		家族や友人からの援助	その根拠について、詳しく尋ねる
		公的な援助	その根拠について、詳しく尋ねる
他人が援助を受けているのを見て何か思うことはあるか		家族や友人からの援助	他人が、家族や友人などから援助を受けていることを見聞してどう思うかについて、可能な限り詳しく尋ねる
		公的な援助	他人が、行政や専門職者などから援助を受けていることを見聞してどう思うかについて、可能な限り詳しく尋ねる
そのように考えるのはなぜか		家族や友人からの援助	その根拠について、詳しく尋ねる
		公的な援助	その根拠について、詳しく尋ねる
今、自分に必要だと思っている援助はあるか		家族や友人からの援助	今の自分に必要と思われる家族や友人からの援助の有無について、可能な限り詳しく尋ねる
		公的な援助	今の自分に必要と思われる行政や専門職者からの援助の有無について、可能な限り詳しく尋ねる
そのように考えるのはなぜか		家族や友人からの援助	その根拠について、詳しく尋ねる
		公的な援助	その根拠について、詳しく尋ねる